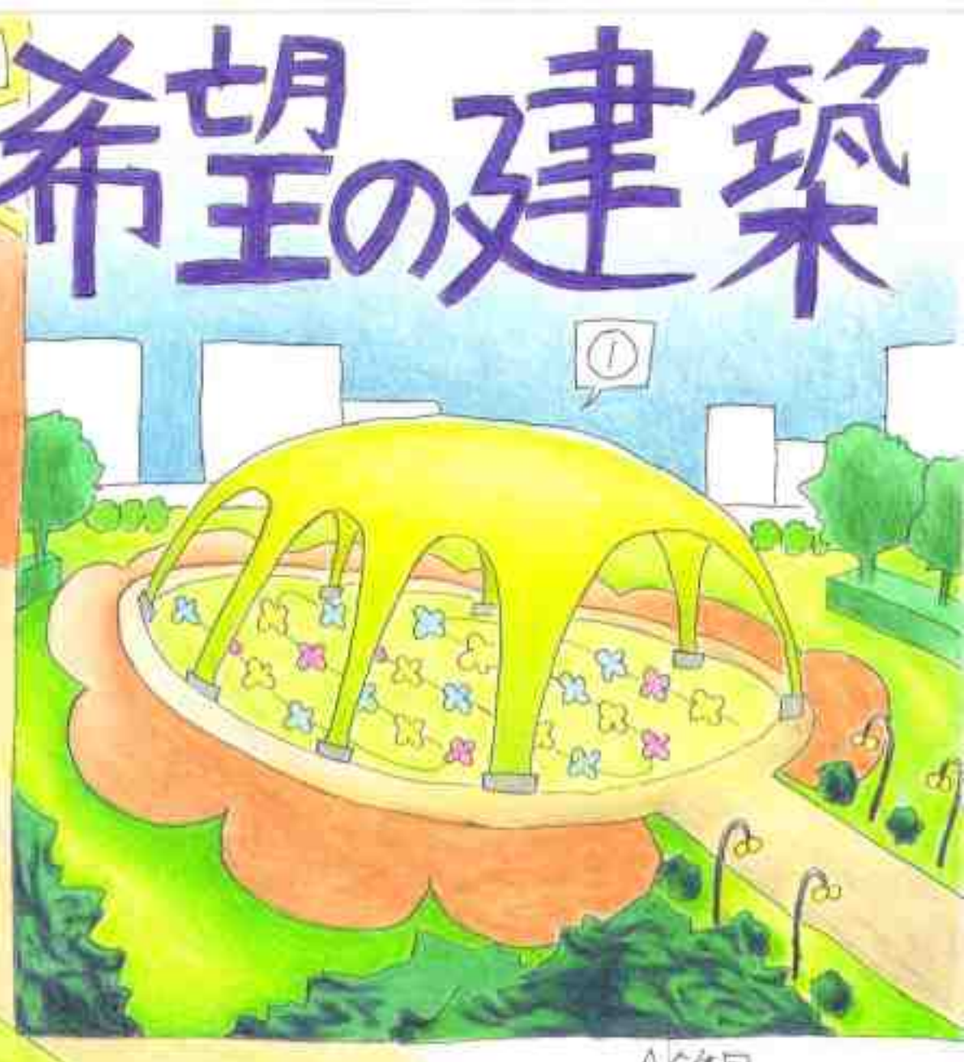
「どうぞ!」は人と未来の希望の建築



△全体図

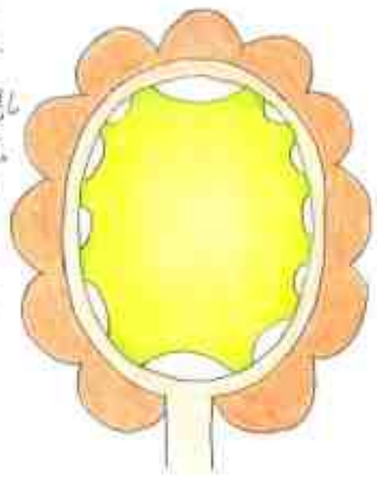
◁建物内部

(吹き出し)内の番号は次ページの項目に対応したものになっています。

この建築は、バザーを主とした人と人が開催できる広場です。「どうぞ」という言葉には、誠やと物を共有する、与えるといった他者との関わりを指唆する意味が含まれています。何より「どうぞ!」という掛け声に自分以外の他者の存在は絶対です。人は頼ってばかりに頼り、共存していかなければ生きていけない存在です。このバザー会場は人とのつながりを強め、人の未来の希望になりうると信じています。

①ドームの形状

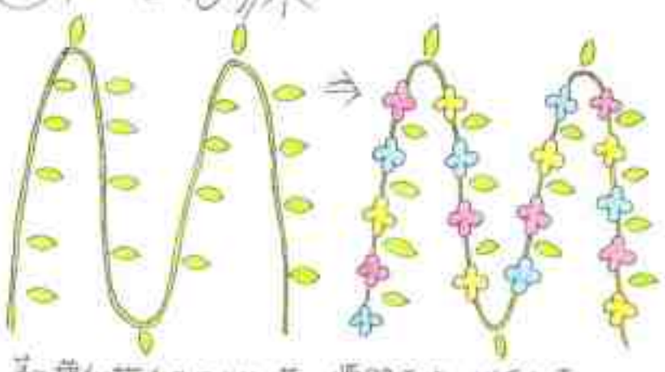
「花」をモチーフにしており親しみを持ってもらえるようになっています。散歩がてら、少しの休憩に、雨宿りに、気軽に立ち寄れる空間。中のワゴンを取り除けば、もちろんバザー以外のその他イベントにも使用できます。



②ドームの天井

ドームの天井は網目模様になっており、日光が差しこむことで木もれ日を再現し、よりやすらかな気持ちになれるような設計です。また、網目部分はガラス張りであり、ドーム内は雨が降っても濡れないようになっています。そのかわり、出入り口を大きくし風通しを良くして空気が籠もらないように、また柱にミストが取りつけられていて、夏に暑くなりすぎないように配慮した設計となっています。

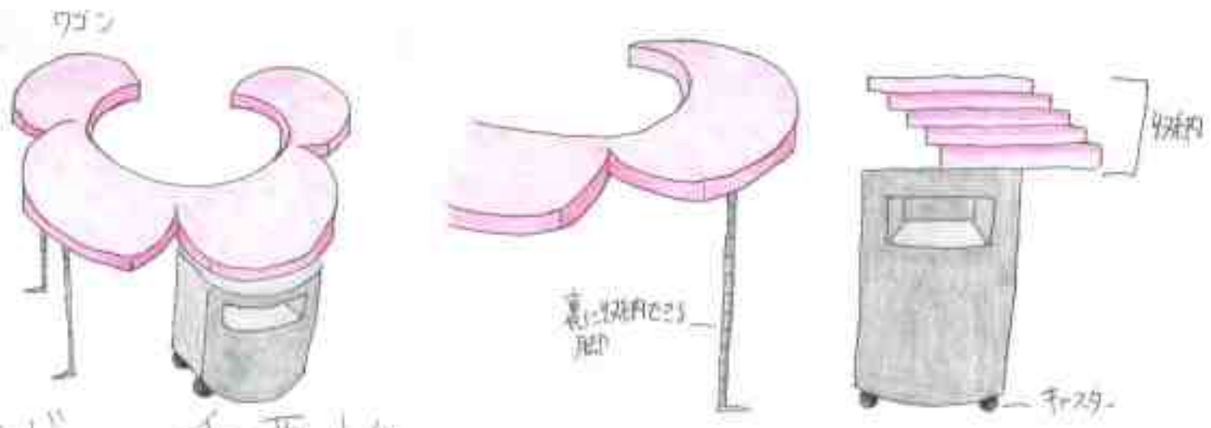
③ドームの床



蔓と葉が描かれており、蔓で順路をさりげなく表しています。また葉で区画を区切り、1グループの展開規模を指定しています。どちらも歩くスペースが動線を確保することで混乱を防ぐための工夫です。

④ワゴンの構造

ワゴンもドーム同様「花」モチーフの設計となっています。円形となっているのでお客さんがどこからでも並べられたものを見ることができ、また売り手もすぐにお客さんに対応することが可能です。
移動させやすいようにキャスターがついており、また花びら部分はスライド式で出し入れが可能なので保管しやすい設計になっています。



より人を呼ぶバザーの重要性

バザーとは社会事業などの資金を集める目的で催す慈善市のことを指します。そして、主にフリーマーケット方式で行われることが多い催しです。よりたくさんの人々に自分がもう必要ではなくなった物たちを「どうぞ」と渡すことは私たちの社会、そして私たちの未来に利益をもたらすでしょう。

利点①地域の人々との親しい関係の確立

バザーは一般的なお店よりも売り手と買い手の距離が近く、置いてある物の説明や値段交渉などで必然的に会話が増えます。これをきっかけに新たな関係を築くことができる可能性は充分にあります。

利点②ゴミを削減することができる

ゴミとなるかもしれなかったものに新しい持ち主ができることでゴミにならず、ゴミを減らすことができます。多くの人が参加すればするほど環境に優しいものとなり、より良い未来に繋がります。

⑤目線の高さとワゴン

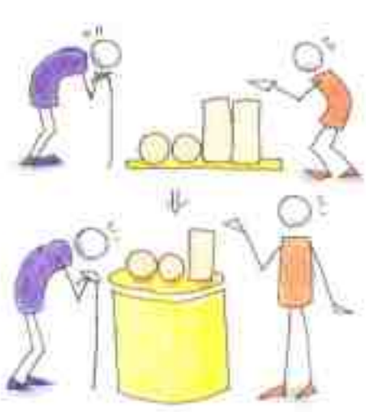
このフリーマーケットでワゴンを使用することでより物を買ってもらえるようコミュニケーションを盛んにする工夫がなされています。ワゴンを使用すると従来よりも目線が高くなるため、買い手と商品、売り手の距離が近くなり良い変化が望めます。

⑥ワゴンのユニバーサルデザイン

ワゴンを使用することにおいてより多くの人がバザーに参加でき楽しむことができます。

ex. 車イスの方

ex. お年寄りの方



⑦ワゴンの様々な使い方

④のワゴンの構造でも触れましたが、ワゴンは机部分が折り畳み式です。これを応用することによって様々な使用方法があります。例えば、誰かと協力してショップを出す場合、入り口が狭いようでしたら机をひとつしまって入り口を広げることができます。また、スペースが狭いようでしたら複数のワゴンを組み合わせてスペースを広げることができます。こういった、複数のワゴンを使うことで、大規模なイベントを行うこともできます。

公園に舞台をつくる

1はじめに－バレエと経済効率－

私は小さい頃から趣味としてバレエを習っているが、バレエはとても経済効率の点で見ればあまり良くないものである。しかし、舞台を見た人々はその芸術に、美しさや迫力に胸を打たれ、経済効率を追い求めていては得られない大切な何かを受け取るのではないだろうか。芸術一般に言えることだが、直接物理的に物を獲得するのでは無いけれど、物理的なもの以上のもの、それが欠けてしまっては生きる意味を見失ってしまうようなものをもたらしてくれるような気がする。

しかし、経済効率でその価値を判断される社会であるために、バレリーナなど芸術の担い手たちが生きづらくなっている。また、文化や芸術が私たちの日々の生活から遠いものとなってゆき私たち自身の日常も潤いのない淡白なものになっていないだろうか。

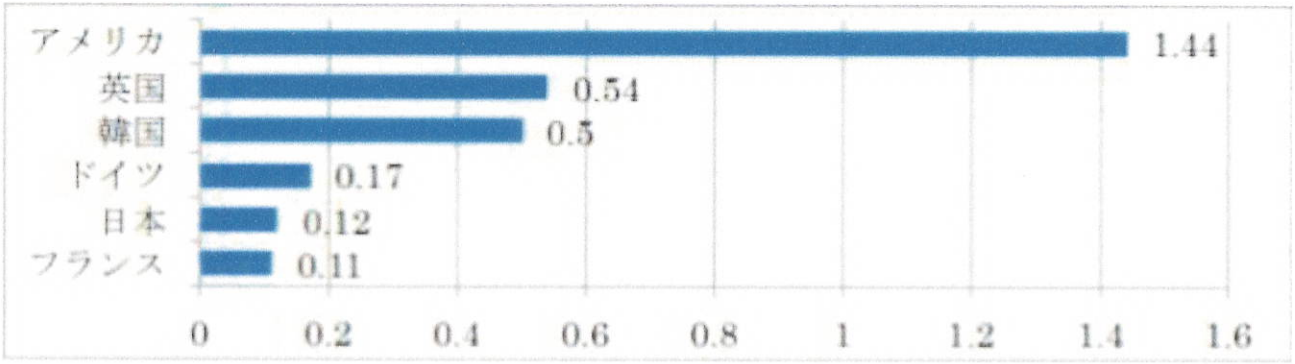
とくに日本のバレエダンサーは、バレエを踊るだけで生活できるのは本当に僅かで、ほとんどのバレエダンサーがダンサーとしての収入はほとんど 0 に近く、バレエのレッスンを受け持っていたり、バイトをすることによって成り立たせているというのが実情である。それに比べてヨーロッパやアメリカではバレエダンサーという職業で生活している人は少なくない。よりダンサーが働きやすい環境があるのだ。それは国民のバレエに対する感覚の違いである。より、バレエが国民の身近にあるのだ。

まず、下のグラフは文化庁が日本、イギリス、フランス、ドイツ、アメリカ、韓国に対して調査したものである(参考文献①参照)。1つ目のグラフを見ると、あきらかに日本とアメリカの文化予算額が他の国々に比べて低いことが分かる。(グラフ 1) フランスや、イギリスなどでは国が国家公務員としてバレエダンサーを雇用したり、助成金を出したりしてバレエ文化を支えている。また、2つ目のグラフを見てほしい。(グラフ 2) アメリカでは、桁違いな民間による個人の募金がなされ、それによってダンサーたちは支えられているのである。

グラフ 1 各国の国家予算及び、人口と文化予算額の比率

	2017 文化関連機関予算（現地通貨）	2017 歳出額（現地通貨）	国家予算に対する文化予算の比率	人口	国民 1 人当たりの文化予算
日本	1,043 億円	97 兆 4,547 億円	0.11%	1 億 2,730 万人	819 円
イギリス	11.79 億£	7,324 億£	0.16%	6,370 万人	2,824 円
アメリカ	13.99 億 $	6 兆 0,823 億 $	0.02%	3 億 1,890 万人	479 円
ドイツ	16.12 億€	3,291 億€	0.49%	8,252 万人	2,634 円
フランス	35.97 億€	4,109 億€	0.88%	6,410 万人	7,568 円
韓国	2 兆 8,130 億?	268 兆 7,000 億?	1.05%	5,145 万人	5,467 円

グラフ 2 各国の個人寄付の比較(対 GDP 比) 単位%



2 提案内容

日本でも、もっと多くの人々にバレエを身近に感じてもらい興味を持ってもらうことが重要である。よって、人々が身近に行ける場所で舞台を行うことの出来る場を提案する。

この時、次の点が重要である。

① 観に行くハードルが低く、人々の身近であること。

② できるだけ舞台芸術としてのバレエが伝わる環境であること。

③ 人々が集まりたくなるような居心地のよい空間であること

近所の公園で小規模で公演する

私は人々の身近な公園の中に舞台を作ることを提案する。公演と言っても遊具がある砂地の公園ではなく木が何本か生えており緑に溢れている公園である。公園は自然があるため、③の点でも優れている。ショッピングモールや、道路、ビルとビルに挟まれているような人々が忙しく行き交う場所とは違い、人々が安らぎゆっくりとくつろぎその場の空間を楽しむ場所であるため、最適であると考える。また、観客数も大きな劇場での公演のように何百人、何千人も入れるのではなく、その公園の規模にあった人数の観客が観る仕様にする。

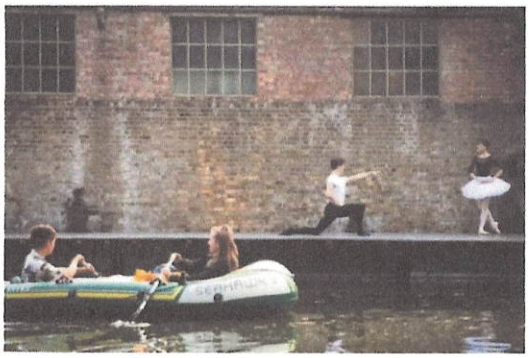
無料で公演する

また、この舞台はバレエを人々の身近なものへとするためのものであるので、できるだけ無料で公演し、大きな劇場での舞台やバレエ団への募金に興味を持ってもらうものにする。現在、バレエは1回1万円程かかる高級なものであるため、ハードルが高いのだ。そんなことをしたらバレエダンサーが赤字ではないかと思ってしまうが、まずバレエを身近に感じてもらうことを優先すべきである。日本ではバレエを習っている人やプロのバレエダンサーがバレエの舞台を見に行くという踊る者同士が相互に鑑賞し合っている状態である。私は俳優でない人々が映画を見に行くように、バレエを人々が楽しむ状態にしたい。

また、バレリーナにとってもパフォーマンスの機会は貴重なもので、たくさんの舞台経験をつみたいという若いダンサーもバレエ人口の多い日本には多くいる。世界でも最高峰のバレエ団、イギリスのロイヤル・バレエ団では、コロナ禍で休演が続く中、少しでもパフォーマンスの機会を増やそうと運河沿いで、緑と水、白鳥などの動物に囲まれたステージで毎週日曜日に無料公演を行った。たくさんの観客が押し寄せ、大変盛り上がったそうだ。私はこのような公演を理想としている。バレエダンサーの白鳥の踊りを本物の白鳥が鑑賞していたり、ボートに乗りながらバレエを楽しむ人もいたそうだ。(写真①、②)

写真①

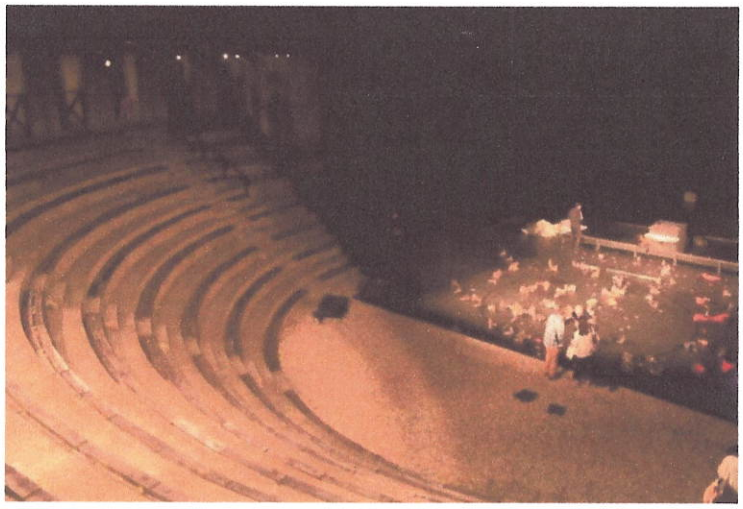
写真②



段々の観客席

バレエを身近なものにすると言っても、舞台芸術であるバレエの美しさ、芸術性がしっかりと伝わる公演を行わなければ意味がない。周囲がうるさくて曲が聞こえなかったり前の人であまり見えなかったりしては踊りが伝わらない。ある程度多くの人が集まっても見えるように、下の写真のような段々の石段を提案する。しかし、これはもともとの高低差が必要であるので、高低差の無い公園では、段は4、5段程度にし、反対側にも段を作り、観客席と公園の境界線をあまり感じさせないものにしたい。下の写真は富山県の利賀芸術公園の野外劇場で、第1回世界演劇祭のために建築されたものである。(写真③)

写真③



舞台の周りに飲食店や雑貨屋、服屋を設置する

人々にとってより快適で、習慣的に来る場所にするために、飲食店や雑貨屋、服屋を設置する。友達や家族、または1人で夕飯や昼食を食べたあとに鑑賞し、そのあと雑貨を見るなどということが出来るようにする。ショッピングセンターのような空間ではなく、のんびりくつろぐ空間にしたいので、そのコンセプトに合ったお店を集めたい。また、野外で公演を行うため周りが住宅だと音がうるさいと苦情が起こることが考えられるが、周りがお店であれば、その問題もなくなる。

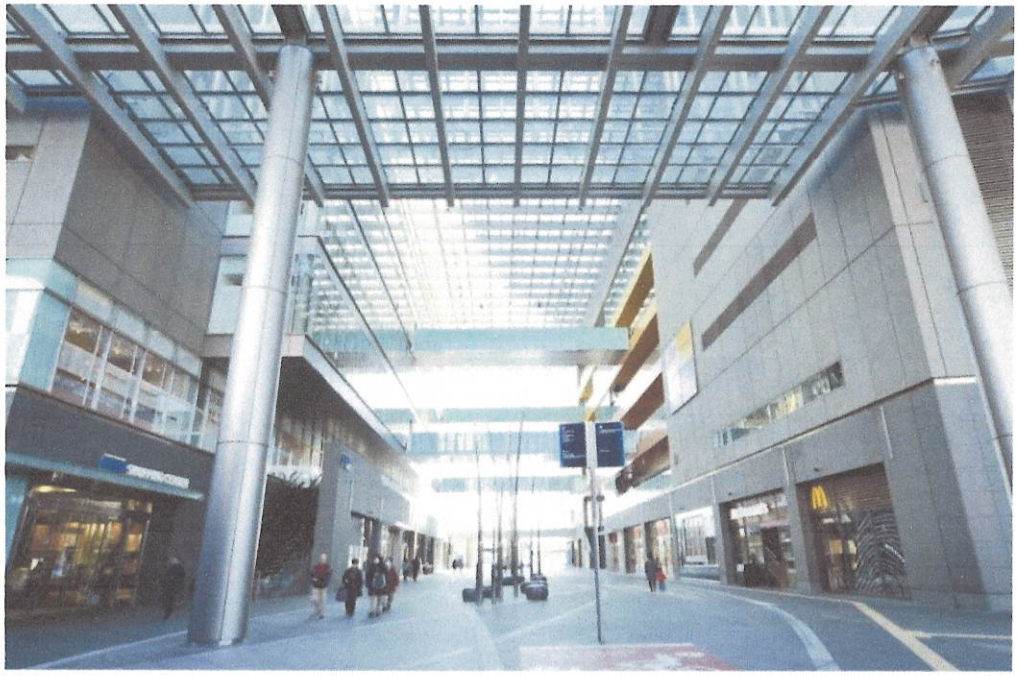
幕ものではなく1、2曲ごとの作品集に

幕ものでは2時間～3時間かかってしまい、舞台装置に費用が必要に加えて、始まりの時間に遅れた人は鑑賞しにくくなってしまう。途中から観るのではその舞台の魅力は伝わりきらない。そのため、1、2曲ごとの作品集を公演し、1作品終わる事に客席に入れるようにし、音を立てたり、立ち上がったりしてはいけないというルールが守られる環境を作る。人々が心から芸術を楽しめることが大切である。

ガラスの天井で、空が見えるように

野外公演の問題点は気候に左右されるという点である。雨や暴風に見舞われたら中止になってしまう。しかし屋外感は残したいので、壁は作らずに日光の差すガラス張りの天井を作ることを提案する。また、天井の高さは10～20メートル程度にし、なるべく天井があることを感じさせず、開放感を感じられるようにしたい。たとえば、二子玉川のガレリアの天井のようなものが理想である。全天候型のガラス張りの天井高(高さ30メートル)で、快適な空間なのに外にいるような気分にさせる。(写真④)

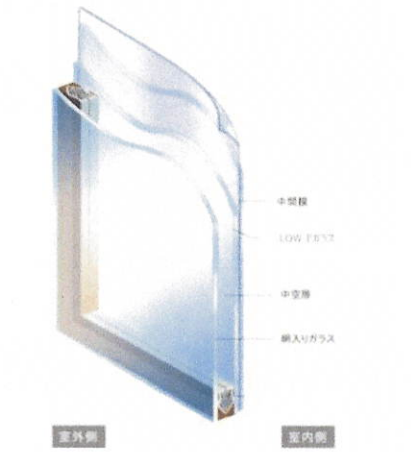
写真④



写真⑤

新宿住友ビルにも、ガラスの大屋根がかけられた全天候型のイベント空間「三角広場」(約3,250平方メートル）があるそうだ。(写真⑤) 高さ最大25mともなるガラスの大屋根は、快適性と安全性も考慮し、合わせガラスを使用したLow-E複層ガラスを提案し、採用されているという。このガラスは、合わせガラスを使用しているため、万が一割れても中間膜があり、大きな破片が落下することのない、高い安全性を誇る。さらに、遮熱性と断熱性能に優れたLow-E複層ガラスの構造になっているため、四季を通して快適な空間になるよう設計されているのだ。(写真⑥)

写真⑥



このような全天候型の安全で快適なガラス張りの天井を提案する。

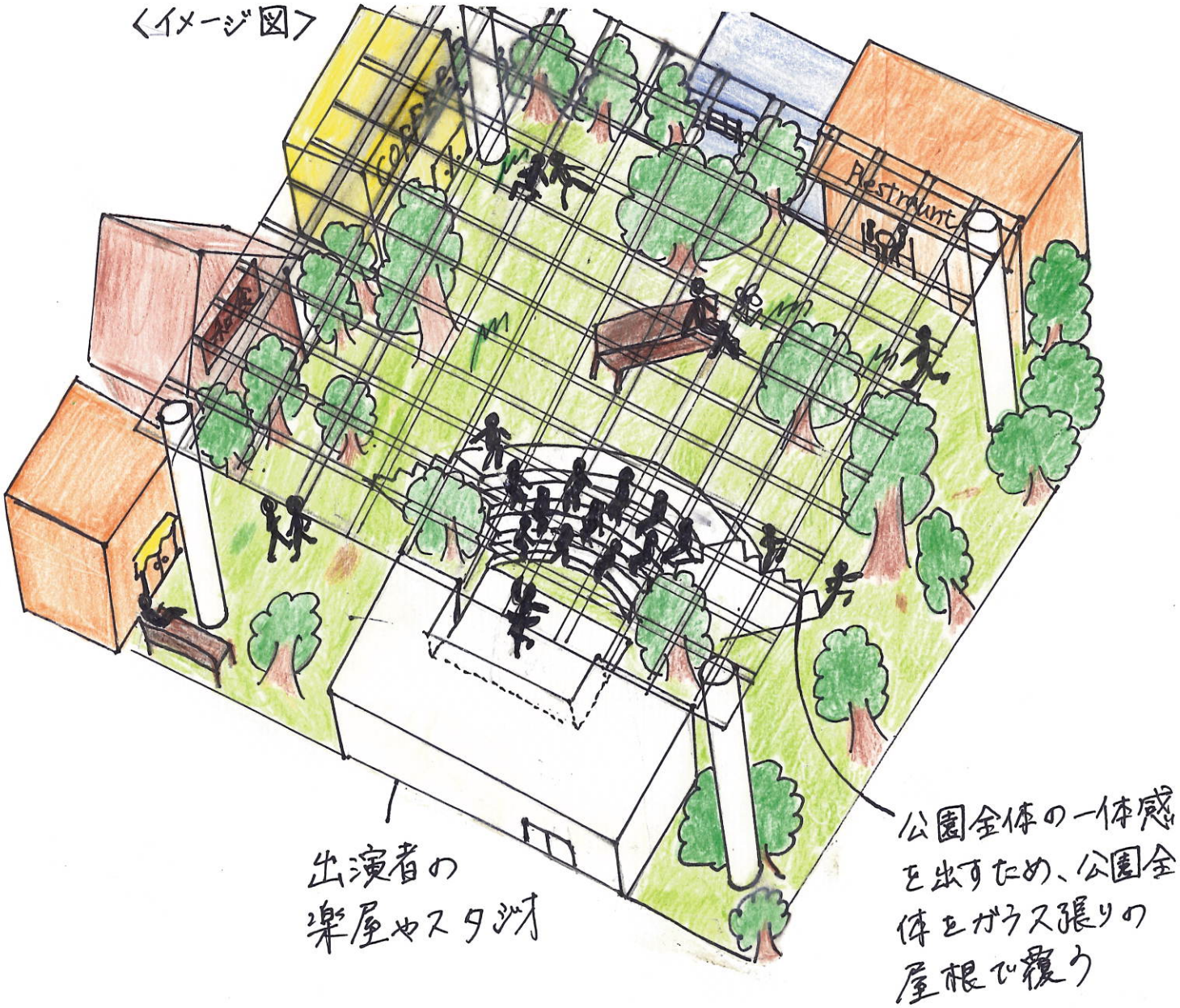
結果として、公園周辺の治安改善にも

私の家の近所の公園では夜になるとあまり人気がなく、一人で歩くには少し怖い状態である。公園の周りにお店が開かれていたり、舞台が公演されていたりすることで安心して遊びに行ける場所になるだろう。

3終わりに

色々と理想の空間を考えてはみたが、実際に作るとなると今までの公園を全く別の新たな空間にするのであるから、賛否が分かれるだろうから、なかなか難しいのだと思う。しかし、この空間が人々の生活の１部になれば、芸術や自然が今よりも身近な“当たり前にあるもの”へと変わるのではないだろうか。それは、人々の生活の質が１つ上がることと言えるのではないだろうか。 また、人々が皆時間に追われている今、大きなスーパーやショッピングセンター、巨大ビルなどとは異なる、時間がゆっくりと流れる、時間の流れを楽しむ空間こそ求められている。この私が提案する空間造りは確実に価値のあるものであり、近未来にとって必要不可欠なものとさえ言えるのではないか。

〈イメージ図〉



4 参考文献

① 諸外国における文化政策等の比較調査研究事業報告書－文化庁
https://www.google.com/url?q=https://www.bunka.go.jp/tokei_hakusho_shuppan/tokeichosa/pdf/r1393024_04.pdf&usg=AOvVaw1XhVPx5ENB0m0li5fpQdYd

② 「こんなの初めて！」ロイヤル・バレエ団が野外公演［2020/08/24 10:31］－朝日新聞
https://www.google.com/url?q=https://news.tv-asahi.co.jp/news_international/articles/amp/000191388.html&usg=AOvVaw0C8YWqLC32VhqseSRxSbjD

③ メディアガイド|二子玉川ライズ
https://www.rise.sc/mediaguide/

④ 演劇と、その空間｜“演劇”による地域活性－ノムログ 畑江 輝
https://www.google.com/url?q=https://www.nomlab.jp/jp/nomlog/detail/24&usg=AOvVaw3ksuZTwVxmYUXlnUUcDUqL

⑤ ガラス張りの全天候型イベント空間「新宿住友ビル・三角広場」に、合わせガラスを使用した日本板硝子製 Low-E 複層ガラスが採用－日刊工業新聞 2020/07/28
https://www.nikkan.co.jp/releases/view/111687

新型コロナウイルスに立ち向かう「助け合い」の建築

1. はじめに

「連帯責任」が当たり前の世の中から、少しずつその「連帯責任」と社会との間に違和感が生じ始め、近年「自己責任」が主流になり始めた。

誰か一人のせいで理不尽に自由を侵されるということが少しずつ減り始めたが、その代わりに人と人との関わりあいが根本的に減ってきている。その根本にあるのは「自己責任」という考え方だ。勿論自己責任という考え方がすべて悪いわけではなく、先に述べたように自分が属している共同体の誰か一人のせいで理不尽な扱いを受けたり虐げられたりすることは減ってきた。しかし「自己責任」には「自分の責任は自分でとる」代わりに「誰かが困っていてもそれはその人の責任」という考え方が根付いており、その影響で人と人とのつながり事態が薄らいでいるように感じる。

今回のテーマである「どうぞ」という言葉の大まかな意味を「譲り合い、助け合い」などの意味としてとらえてみると、近年人々の間からは「どうぞ」が減ってきているような気がする。現に、以前乗っていた電車で目的地に停まるのかどうか分からなかったらしい女性が座席に座っていた男性に停車駅を尋ねていたが、男性はスマホを見たまま黙っていた。
結局その女性を見かねて別の女性がその女性の質問に答えていたが、目の前で繰り広げられていた展開に驚きを隠せなかった。
勿論全員が全員その男性のような対応をするとは思っていない。それに妊婦の方や小さな子供を連れている母親らしき女性に席を譲る人だって多く目にしてきた。
しかし何事においてもやはりいいことよりも悪いことの方が目立つ。実際にそのような光景を見てしまったことで、先に述べた考え方が浸透しているように思えてしまっている。

新型コロナウイルス流行の影響によって以前よりも「助け合い」の精神が必要になったからこそ、自分たちなりにできることを探していくのが大切だ。
そもそも建築とは、我々の周りにあふれている一般的な「建物」のみを指すのではなく、その建築「物」が出来上がるまでの過程もすべて含めて「建築」と呼ぶ。

今回はその「過程」にも重きを置いて人と人とのつながりや関係性、「どうぞ」を構築できるような建築について提案していこうと思う。

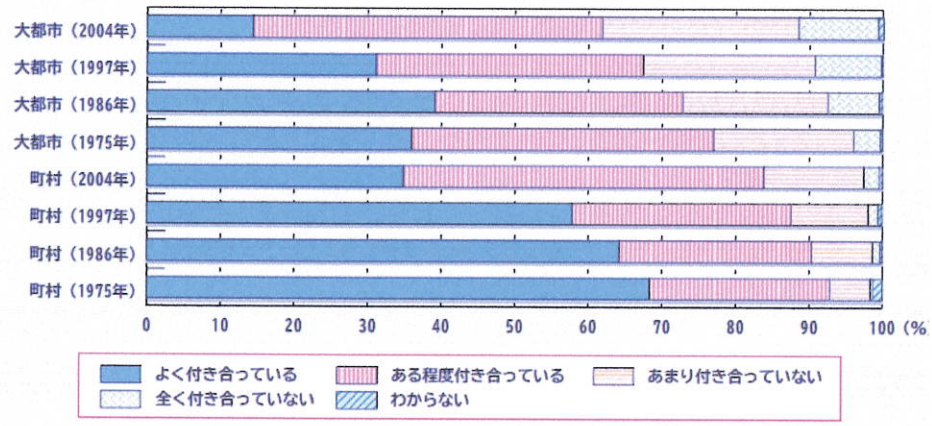
2.ご近所付き合いの変化

「はじめに」で述べた通り、人と人とのつながりや関わり合いが減ってきていると考えられる。

その典型例が「ご近所付き合い」だ。

以下の図は厚生労働省が実施したアンケートの結果である。

図表1-2-17　近所付き合いの程度の変遷（大都市と町村）



資料：　内閣府「社会意識に関する世論調査」から厚生労働省政策統括官付政策評価官室にて作成
（注1）　1986年の「大都市」は「11大市」、1975年の「大都市」は「10大市」。
（注2）　1997年以前の回答の選択肢は、左から「親しく付き合っている」「付き合いはしているがあまり親しくはない」「あまり付き合っていない」「全く付き合っていない」「わからない」となっている。

見てわかる通り 1975 から 2004 にかけてど近隣住民と「良く付き合っている」の割合が減少傾向にあり、逆に「あまり付き合っていない」、「まったく付き合っていない」の割合が増えつつある。

特に大都市ではその傾向が顕著で、大都市ほどではなくても町村でもその傾向を観測することができる。

これの最新データは 2004 年となっているが、今はそれから 15 年以上たっているため、ご近所付き合いをよくしていると答える人はより少なくなっていると考えても何ら不自然な点はないだろう。

また、2020 年の頭から我々はステイホームや自宅での外出自粛を余儀なくされており、それに伴ってオンライン授業や在宅ワークの人口も増えてきた。それにより、家にいる時間が長くなったことによるストレスなどからご近所トラブルが例年に比べて非常に多くなっている。2020 年 5 月の情報によると 3,4 月時点でご近所トラブルの苦情・通報が例年の 5 倍にまでなっている管理会社もあるという。

ただでさえ近所との付き合いが減ってきているというのに、その上新型コロナウイルスの流行というイレギュラーな事態が重なってしまえばご近所トラブルの頻発は避けられないだろう。

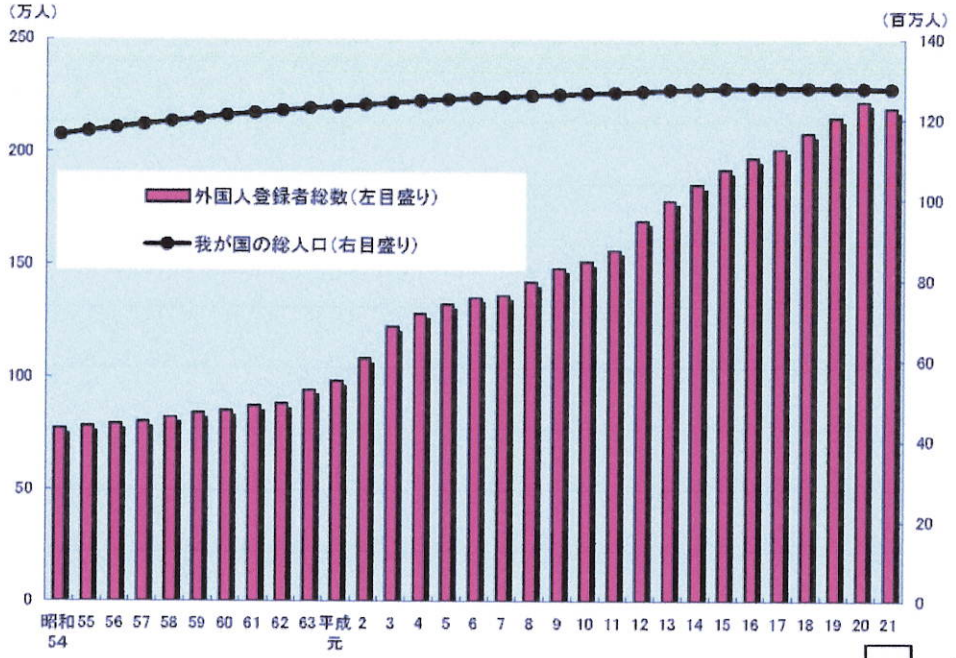
3.「助け合い」、「譲り合い」の建築

建築という言葉には「建築物を作る人間の行為、あるいはその行為によって生み出された建築物」という意味がある。

建築というと一般的には後者のみの意味でとらえがちだが、今回は前者に重きを置いて話を展開させていきたい。

まず在日外国人がどれほど増加傾向にあるのか。以下の図は外国人登録者総数の変移と日本の総人口の変化である。

【第１図】　外国人登録者総数・我が国の総人口の推移



（人）

男性	女性	合計
1,005,479	1,180,642	2,186,121

（外国人登録者総数は各年末現在，我が国の総人口は各年１０月１日現在）

見てわかる通り在日外国人の人口は年々増加しており、対照的に日本の総人口は緩やかではあるが減少傾向にある。

また、2016 年 3 月に法務省は在留外国人が直面している人権問題などに関する調査を行ってまとめた報告書である「外国人住民調査報告書」によると、外国人であることを理由に入居を断られた経験のある人が約 4 割にのぼることが判明した。

上のグラフで最新データである平成 21 年での在日外国人の約四割が外国人であることを理由に入居を拒否された経験があるとすると約 48 万人がそのような経験に遭ってきたと考え

られる。
そこで考えたのが日本に永住予定の外国人の人々向けのマンション・アパートの建築計画だ。
建築物そのものに「譲り合い」や「助け合い」など「どうぞ」の要素はなくとも、その過程で人々は助け合いながら計画を進めていくことになる。
そしてその結果生み出された建築物は差別や偏見に苦しめられている外国人の人々の手助けとなり、その建築物ができた段階で「どうぞ」が達成されていることになる。
またこの計画におけるメリットはもう一つあり、国や自治体が主催して参加者を募り、きちんと給与を出せば失業問題も幾分か軽減されるということだ。
新型ウイルスの流行による影響はすさまじく、毎日国も自治体もその対応で手いっぱいだ。
しかしそれによっていまだに居を定められずに苦しんでいる人たちが放置されていいということにはならない。
そこで国や自治体が動くことも「建築」の広義的な意味には含まれており、その決定こそが「どうぞ」の根源となるのではないだろうか。

4.終わりに

ここまで述べてきたことは一貫して「人と人とのつながり」の重要性と、それを「建築」という方法で結びつける方法の持論だ。

勿論現実がそこまで都合よくいかないことも、人と人とのつながりがそう容易に構築できるものでもないことも十分理解しているつもりだ。

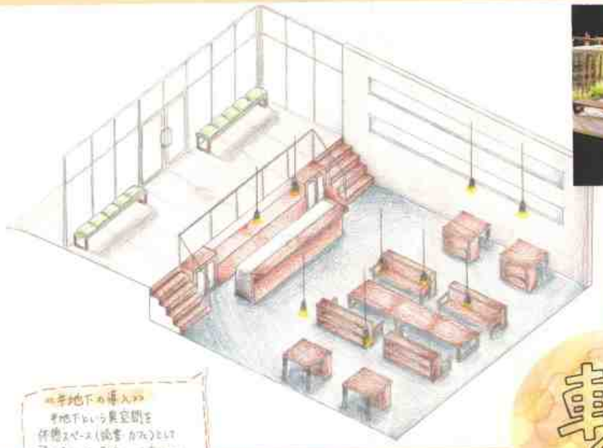
しかし、果たして人とはすべてのつながりを厭う生き物なのだろうか。

「はじめに」で述べたように、確かに人との関わりを持ちたがらない人だってこの世には少なくはない人数がいるだろう。だがそれと同じように人との関わりを持とうと、人と人との助け合いの精神をもって生きている人だって少ない数がいるように思える。

その中には人とかかわるきっかけが持てず、もどかしい思いをしている人だっているはずだ。そういう人たちになんらかのきっかけを与え、その人たちから人と人とのつながり、「助け合い」の輪は広がっていく。

この建築がそうやってその輪を少しでも広げ、この世界が少しでも「助け合い」や「譲り合い」に満ちた優しい世界になることを祈っている。

学校開放考案
ー私たちから始まるー

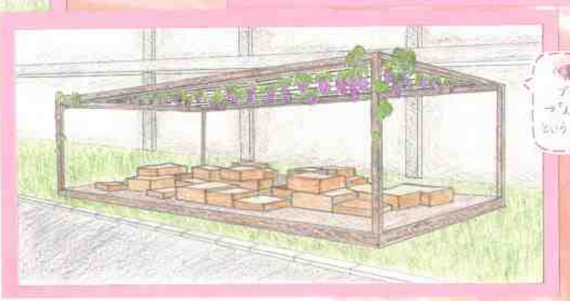


学内通路を利用する地域住民は多いが
コミュニケーションを盛んにとっているわけではない。
もっと地域にも密着し、地域に"どうぞ"できる
親近な学校にしたい。提案した建物用土を繋ぐ
動線上にベンチを設置し、私たちの学校の関係を
図る。また、フェンスをとり壊し、自転車置き場と融合
させることで地域住民も入りやすい親近な場所
にする。

《屋外の休憩》
オープンな空間となり、
学生・地域の人などが
より使いやすい場所と
いてどうぞする。

《カフェと図書館の融合》
机やイスがオ用し合体しており
隣接する図書館との繋がりを
感じられる。利用者の滞在時間
や使い方に合わせて使える。この
カフェには学生や地域住民の使は
なくなったものを自由に寄贈していく。

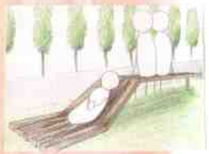
《地下の導入》
地下という異空間を
休憩スペース(談話・カフェ)として
設けることで、学校という意識から
離れたやすらぎの空間をつくる。
地域の人たちも図書館の利用に
併用してくつろげる雰囲気を生みだす。



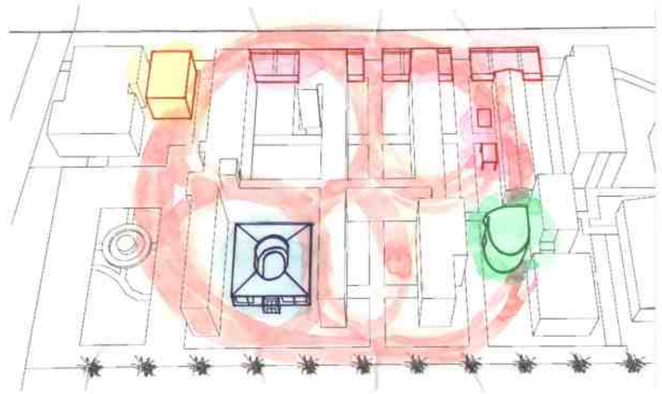
《果実のぶどうだな》
ブドウを摘み、'採'ってあげる。
→"人と関わる"→"新たなどうぞ"
という"どうぞの連鎖"を生む。

《果実の効果》
作物が実を提供されるまでの
忙しさや、学生たちと農作の
時間を共有し、提供する"どうぞ"
の喜びを生みだす。

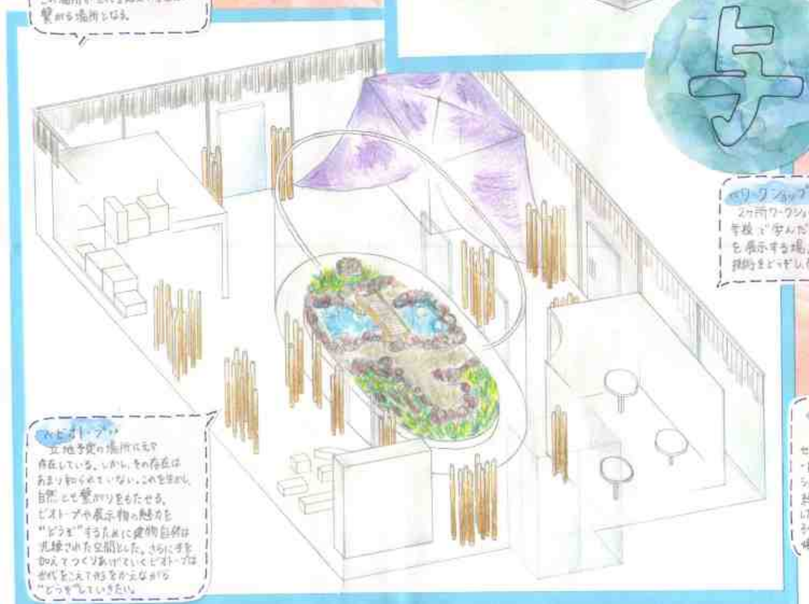
《格子の採光》
格子の隙間により、手前ほど明るく
奥に行くほど暗くというように光の
差し込み具合と陽と陰の空間が
変わっていく。隙間感や光の変化が
利用者の好奇心をそそる。入口は
地域の人も利用しやすいようにオープン
な空間となる。また、バス利用者の
待合所的機能も含めても。また
格子が重なり合って秘連に思い思いの
空間を"どうぞ"する。



《ハコの自由度》
自由度で自由自在にハコの
レイアウトを変えられる。じゃ
普通のハコが置きまじ繋で
出来た空間をつくる。利用者
がそれぞれの利用に空間の
"どうぞ"が連鎖する。



《多様なその場所》
学校生活の基本となる空間は
ぜひ、色々な人の目に止まってほしい。
後輩にとって参考になるものであり
この場所が世代を超えて学生が
繋がる場所となる。



《ビオトープ》
立地条件の場所にもで
存在している。しかし、その存在は
あまり知られていない。この生かし
自然とも繋がりをもたせる。
ビオトープや展示物の魅力を
"どうぞ"するために建物自体は
見隠れされた空間とした。さらに手を
加えてつくりあげていくビオトープは
世代を超えて引き継がれながら
"どうぞ"していきたい。

《ワークショップ》
2カ所ワークショップのエリアがあり、
学校で学んだ専門で創作したもの
を展示する場。他学科や地域の人
接約などで少し、学校の魅力を伝えられる。

《ワークショップの意図》
学校などが主催する体験学習や
セミナーには専門的な内容も多いや
・親の手が意外に意外にも多い。ワーク
ショップを通して自分たちの知識や
経験を地域の人々にも"どうぞ"
したい。それを理由に興味をもつ
子供たちが増えることに繋がれば
嬉しい。

《格子で繋がる"どうぞ"》
デザインコードとして今回の作品全てに取り入れた。
格子を介すことで反対側の様子がハッキリと見えず、
通りすがった人の中が気になるという意欲をかき立てる。
逆に言えば、建物自体がその人たちを招き入れている。
つまり、これは建物から人への"どうぞ"である。

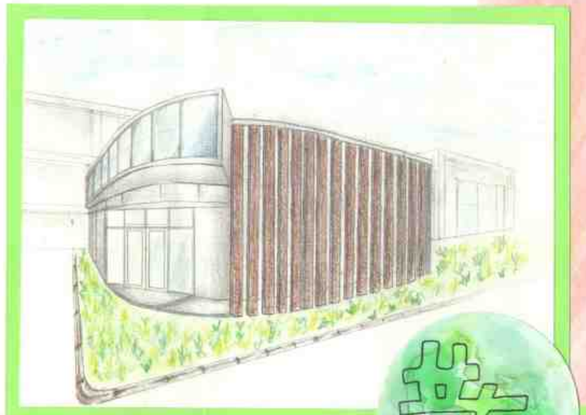
学校から地域への"どうぞ"
⇩
地域住民・小中学生との交流を
もたらす。
⇩
地域全体での"どうぞの連鎖"

どうぞ
- 与える
- 共有する
- 繋がる

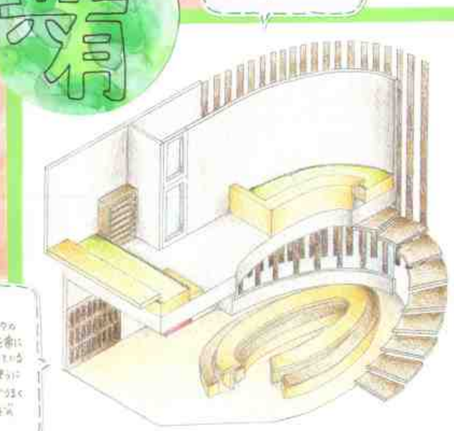
[与える]
・モノを渡す時・譲る時
→ 知識・経験・技術を披露

[共有する]
・同じ時間・場所を過ごす
→同じ空間を同じ目的でシェア

[繋がる]
・認識して互いに思いやる
→間接的に関わりが生まれる



《吹き抜け》
1階と2階を吹き抜けで
繋ぐことで、ひとつの建物として
一体感が生まれ、空間を
共有できる。



《横向きの客席》
横向きにすることで利用する人々の
視線が交わり、お互いの存在を常に
確認することで空間を共有している
事が実感できる。また、机を使うに
就って、道を通り合わない中は少しく
使えない設計になっており"どうぞ"
行動が自然と発生する。

一致団結！ おむすびたちの組体操

■もっとさりげない小さな「どうぞ」

「これをつくってくれたおじさんへ　　このベンチのおかげで雨にぬれなくてすみました。おじさんのおかげで風邪をひかなかったです。地域の人のために作ってくれてありがとうございます。」　このような紙がベンチに貼られていたという心温まるニュースが9月にネットで紹介されました。今回は、こんな小さな「どうぞ」を提案してみようと考えました。

■究極の「どうぞ」って

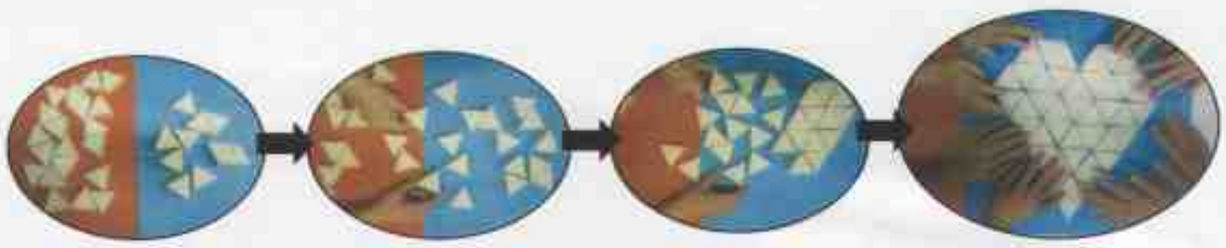
親しみのある、究極のどうぞって何だろう？　そう考えたとき、ふと「おむすび」ってものすごく便利にできていて、人々がおもいやりや優しさを分け合えるのに適しているんだな、と気づきました。

おむすび「どうぞ」、いつでも「どうぞ」、持ち運びに「どうぞ」…

■そうだ、「さんかく！」

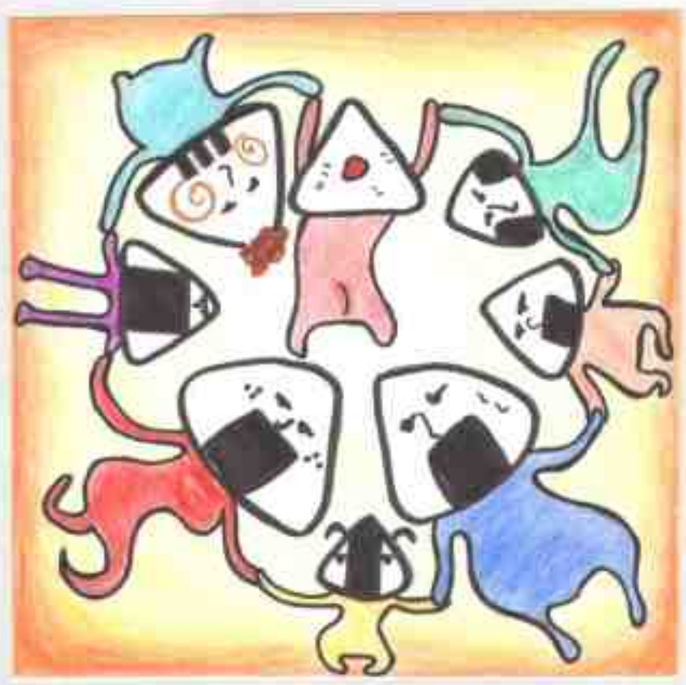
組み合わせしだいで様々な形に変化する「さんかく」を使用し、「どうぞ」の空間を提案します。

「さんかく」の構造体、通称「おむすび」の面を接合させ、様々な形をつくり、それをまた組み合わせることで空間を生み出します。造形の自由度、テクスチャーの自由度、組み立て直すことでの再利用、「おむすび」の貸し借りの自由度、無くしても買い足せる、用途の変更など様々な「便利さ」があります。



●例えば、学校や企業が「どうぞ」と貸し出して「おむすび」の数を増やし大きく活用

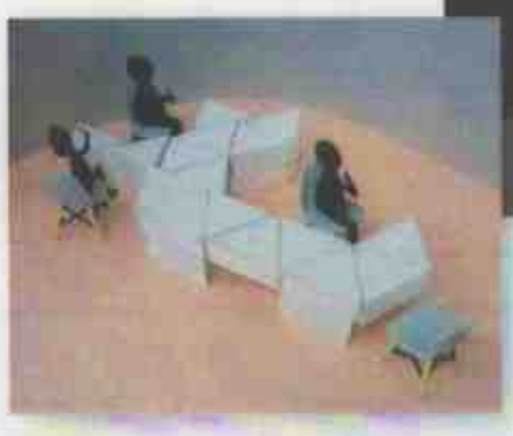
★アーケードとベンチの合体型



★公園や庭の屋根つきベンチ

★自転車置き場とベンチの合体型

★あづまや

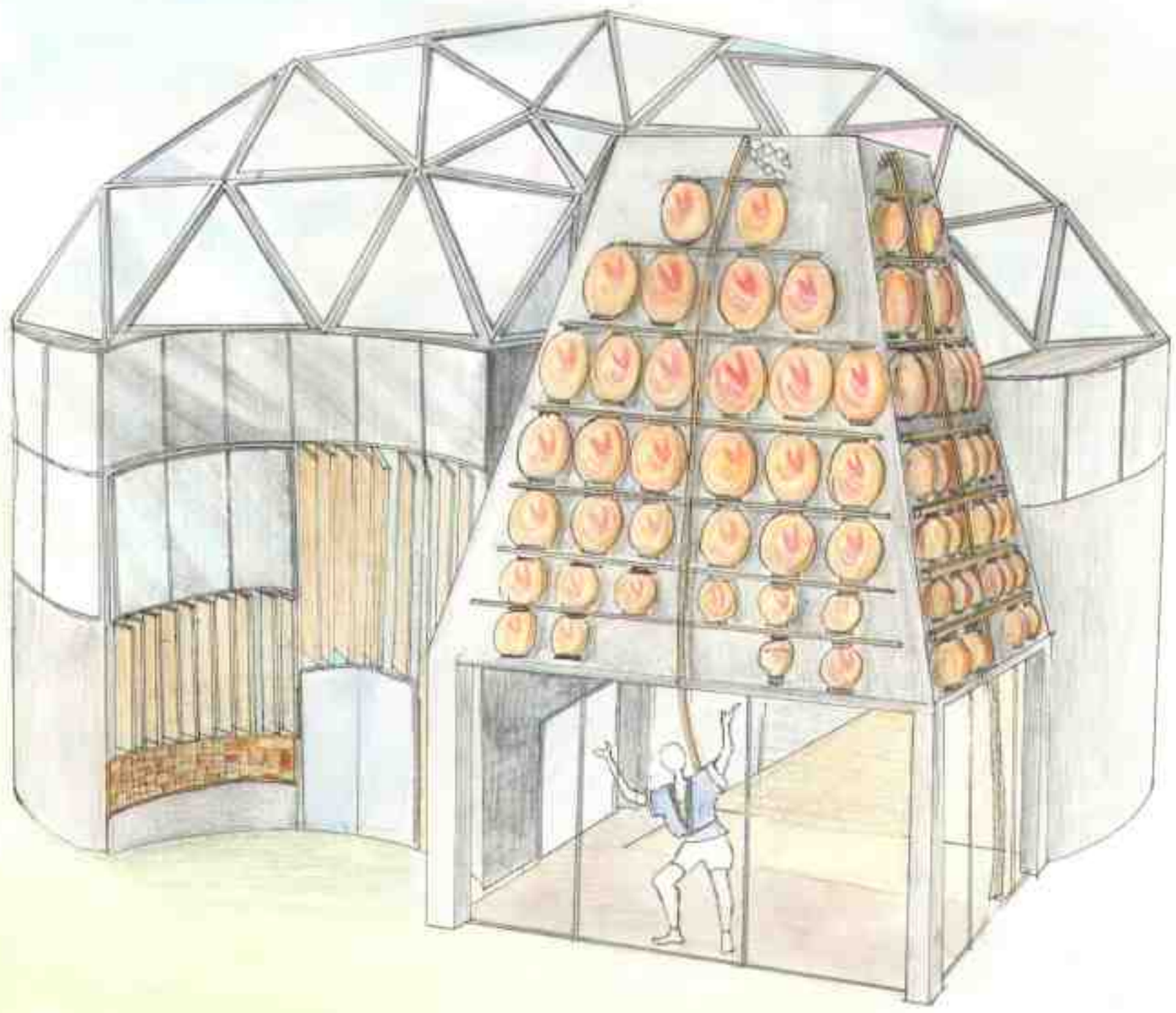


★オフィスレイアウト

秋田県の未来に灯を

コンセプト

現在、伝統的な料理や技術が途絶えつつある。そこで、伝統的な料理や技術が数多く存在する秋田県に注目した。伝統的な料理は食の外部化により手作りされることが少なくなり、手作りの料理をみんなで囲んで食べる機会も昔に比べて少なくなってきている。そこで、昔から今に料理の技術を伝えたい。秋田県に住む若い世代の人や観光に来る県外の人、普段伝統的な料理を手作りしない、学ぶ機会がない人に時間と場を提供し"どうぞ"する。他にも、祭りや工芸品などの伝統文化を"どうぞ"する空間をつくりあげる。この建築で、長い歴史を振り返るきっかけが生まれるだろう。



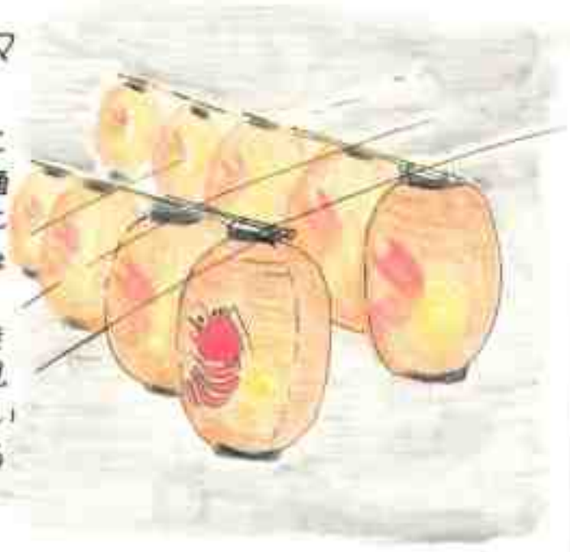
秋田県 Akita Prefecture

東北地方に位置する、人口約93万人の県。県庁所在地は秋田市。
「秋田スギ」「秋田米」など、資源が豊富である。また、世界自然遺産の「白神山地」、日本一の深さを誇る「田沢湖」など豊かな自然環境に囲まれ、観光地や温泉、郷土芸能や祭りのある祭りは有名である。安心・安全の暮らしやすい環境。

「どうぞ」項目

- どうぞ① 秋田県の「技」
- どうぞ② 秋田県の「食」
- どうぞ③ 秋田県つながりの輪
- どうぞ④ 施設提供

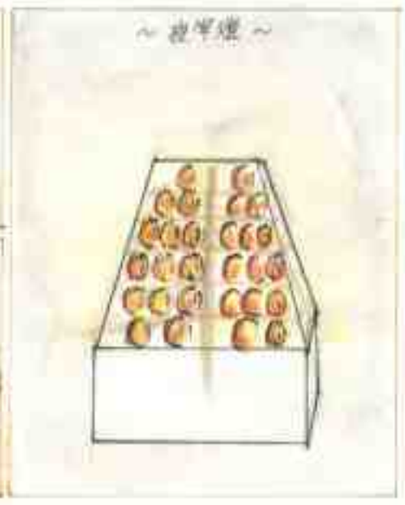
提灯に引き寄せられる人々

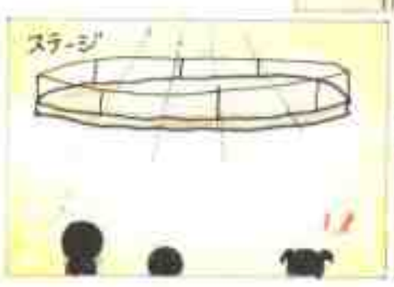


この建築物の最大のポイントは、ガラス張りの中に見える「提灯」である。その迫力がこの建物の前を通りかかる人にも伝わり、人々は引き寄せられるようにこの施設に足を踏み入れるだろう。秋田県には様々な伝統文化が存在するが、特にこの竿燈を扱っている「竿燈祭り」は国重要無形民俗文化財でもあり、大きく有名な祭りだ。この建物に訪れた人々は、間近で見たり記念撮影をしたり、「竿燈祭り」という歴史の長い秋田県の伝統に触れることができる。また、夜になると提灯に灯りがともされ、人々はいつでも「夜竿燈」を味わうことができる。

秋田竿燈祭り ●秋田県秋田市

毎年8月3日から6日にかけて行われる260年以上の歴史を持つ祭。
相撲に見立てた竿燈を練り歩らしながら、豊作を祈る。肩や、額、腰などで竿燈を持ち上げ、技や力を競う。
新型コロナウイルスの影響で昨年、今年と2年連続中止になっている。



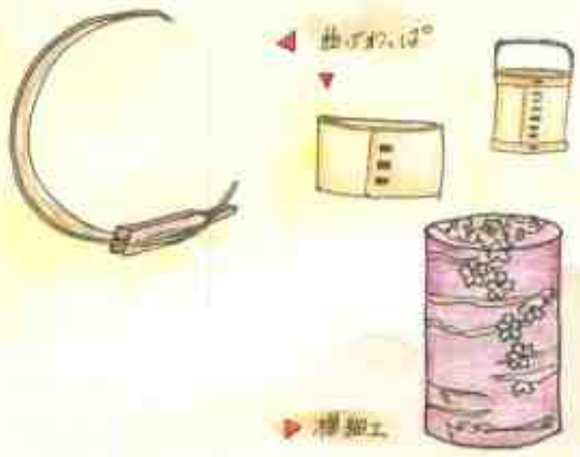


どうぞ① 秋田県の「技」

秋田県には伝統的な技術が存在している。例えば、曲げわっぱ、樺細工などの伝統工芸品。その他にも、花輪ばやしや 西馬音踊り などの祭りが過去から現在まで伝えられ、楽しまれている。

このような色彩豊かな秋田県の文化を失ってはならない。そのために、秋田県の誇れる伝統を受け継ぐ必要がある。そんな手助けをするべく、2Fでは、秋田県の自慢の技術に触れるような場をつくった。

職人が来館し人々に技術を教え、実際に「ちょうちん」や「曲げわっぱ」など、ものづくり体験をすることができる。また、ステージ上での実演や品物の販売、カフェでは曲げわっぱや漆器と共に料理を楽しんだりすることができる。秋田県の伝統工芸品に気軽に触れることができる機会となるだろう。

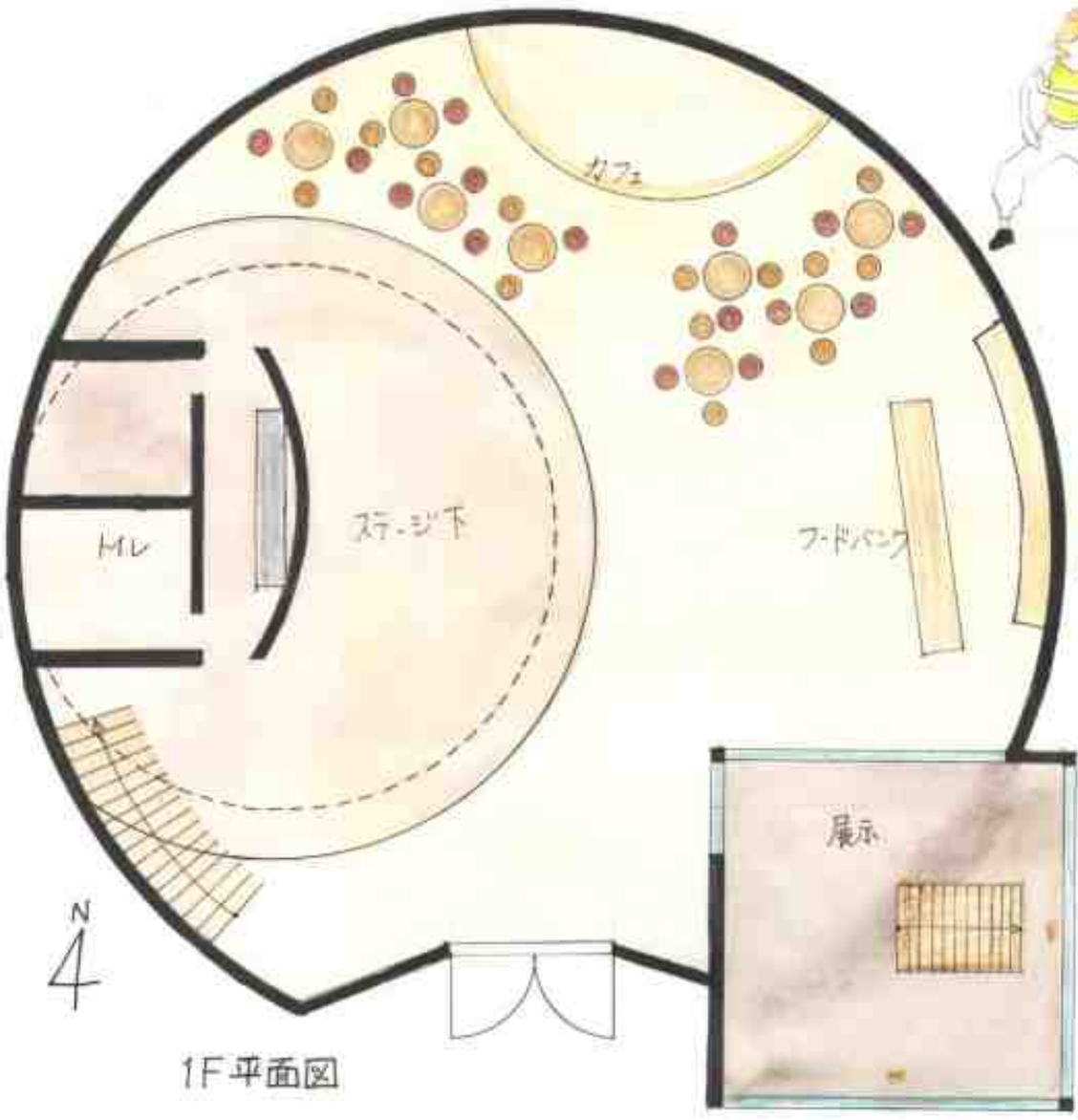


どうぞ② 秋田県の「食」

秋田県には「きりたんぽ鍋」や「いものこ汁」などの伝統食がある。しかし、その伝統食が作られること、食べられることは減っているようだ。また、事前につくられた料理を購入して食べることはあるが、自分では作ることがないという人が増えているという。秋田県民にはもちろん、若い世代や県外の人々に郷土料理で秋田県らしさを広めたい。

そこで、この地域コミュニティ施設で「秋田県伝統食コンテスト」を年に数回開催する。参加者は自分が作った伝統食を来館した人々に提供する。館内にいる全員が提供者と審査員として参加することができる。このコンテストは、外部から来た人々や子供にとっても新たな味を知るきっかけになるだろう。

また、地域住民が料理の余りを持ち寄るフードバンクを行っている。「まだ食べられる」食材を本当に必要としている人に提供し、地域の輪を作り出す。地域や環境に寄り添った取り組みで、誰もが気軽に立ち寄ることができる「味方」のような雰囲気を作り出すことが目標だ。



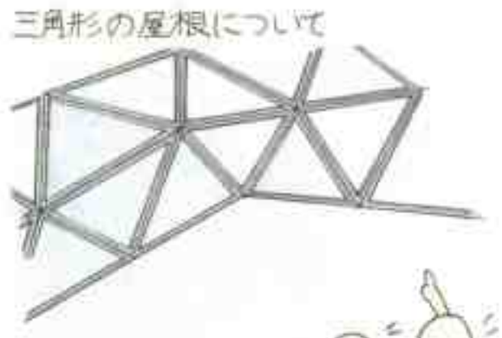
1F平面図

空中に浮くように設置されたステージ。このステージは、一階から様子が見えるよう、壁が半分ガラスでできている。これによって、ステージ上のパフォーマーと観客が一緒になって楽しむことができる。

中2F ステージ

2F平面図

三角形の屋根について



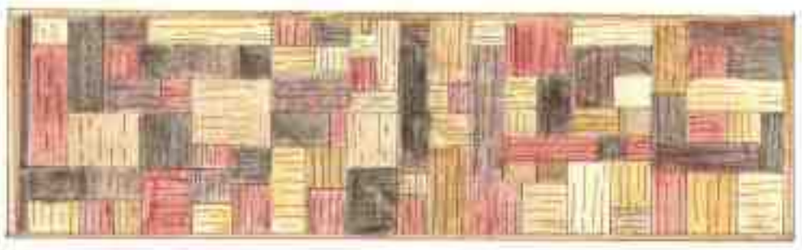
秋田県の積雪に備えて勾配のある屋根のデザインにした。昼間は自然光がスポットライトのようにステージ上やステージ下を照らし、場を盛り上げる。用ガラスをうっすら色ガラスにすることで室内が薄やぐ。この光は日の光の角度によって差し込む位置、明るさが変化する。この色ガラスは、ステンドグラス程華やかではないが、ぼんやり色がつくため、室内に変化が付く。夜間は室内の光が有効に使われる。

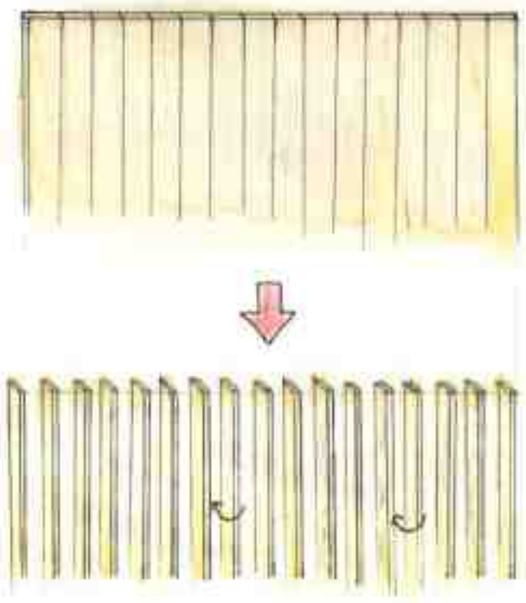
秋田スギをつかったファサード

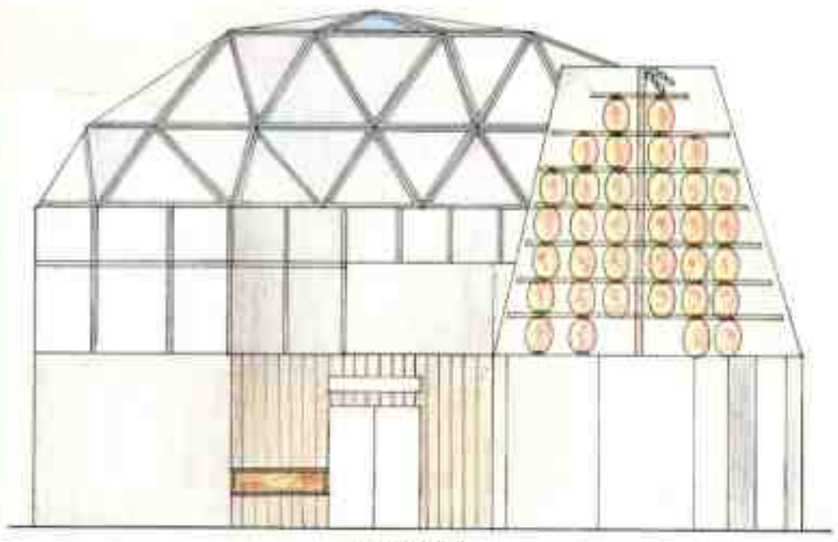
秋田県の代表として日本三大美林の1つの「秋田スギ」が有名だ。美しい木目と強い材質が特徴的である。そんな秋田スギを建物の外壁に設置し、人々の目を引くような看板として利用する。

木目を楽しむことができる平板の連なりの中心に、自由に動かすことができる様々な大きさの薄板を設置し、この建物内での行事を建物の外へ発信する。薄板は、パネルのように壁にはめ込みながら、絵や文字を人間の手によって形作る。

秋田スギを外壁に設置することによって、秋田スギをより身近に感じ、人々の手に触れることで、秋田スギの息づくもりや木によって形られた町の雰囲気のよさを体感することができる。面によって異なる細かな木目の揺れを楽しみ、人々を呼び寄せることをねらいとする。







南立面図

どうぞ③ 施設提供

この建物内には、ステージが備わっている。人々の目線よりも少し高い位置に設置されたステージは、人々の目を引くような存在である。

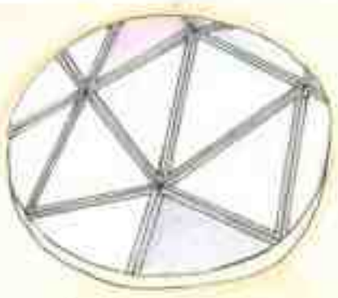
例えば、

- 講演会
- 伝統技術の実演
- 発表会などの行事
- 「秋田県伝統食コンテスト」

など

県内外、どんな人でも利用ができる。オープンで開放的なステージがあるため、建物内はいつでも賑わいがあり、人々が集まりやすいような空間となっている。

ステージの天井部分は天窓であるため、ゲストは自然の採光の下で、観客に囲まれながら自分をアピールしたり、披露したりすることができる。



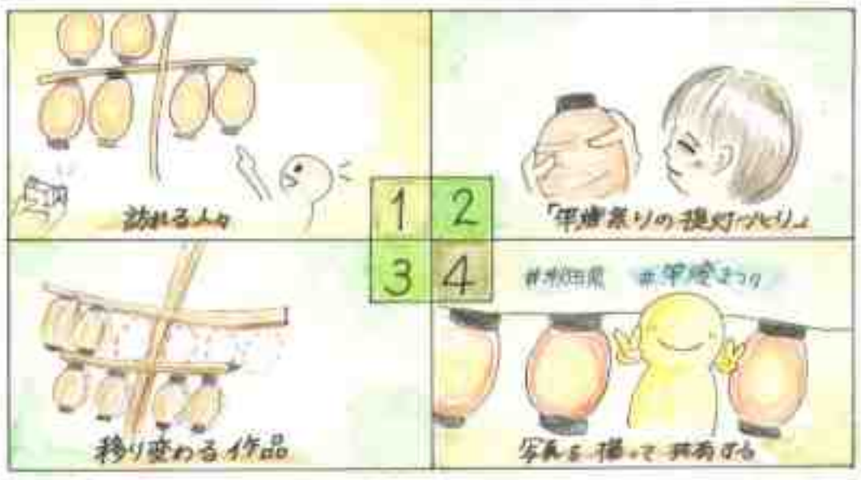
天井

どうぞ④ 秋田県つながりの輪

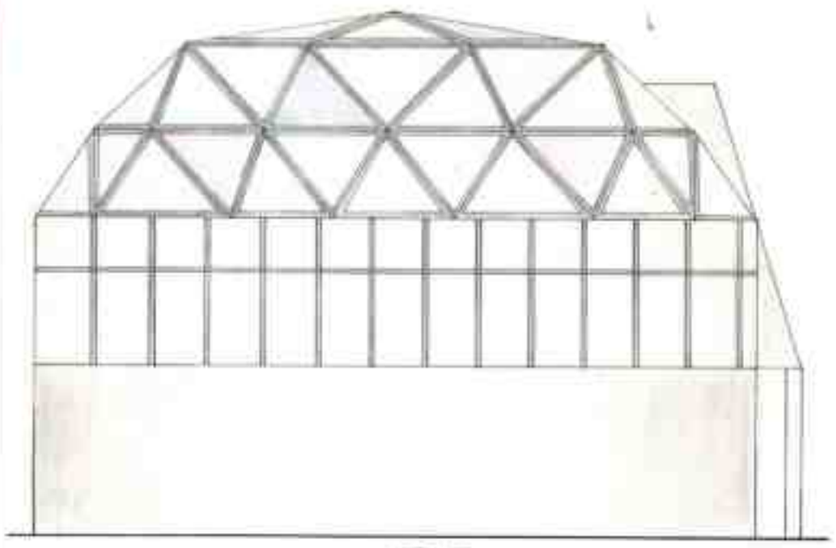
秋田県の魅力を知るためには、たくさんの説明を聞くよりも、実際に自分の手で触れたり感じたりすることが何より必要なことだろう。この地域コミュニティ施設に立ち寄れば、秋田県の雰囲気が感じられるような空間をつくりたい。

④で提示したようにこの施設では、訪れた人々が秋田県の技術を体験することができる。そのいろいろな人が制作した作品をこの建物内に展示し、様々な手によってつくられた1つの大きな作品を作り上げる。そうすれば、初めてこの施設に訪れた人々は、秋田県の人々の雰囲気を味わうことができる。また、その作品は日々更新されながら形を変えてゆくため、見るたびに雰囲気の違う作品を楽しむことができる。

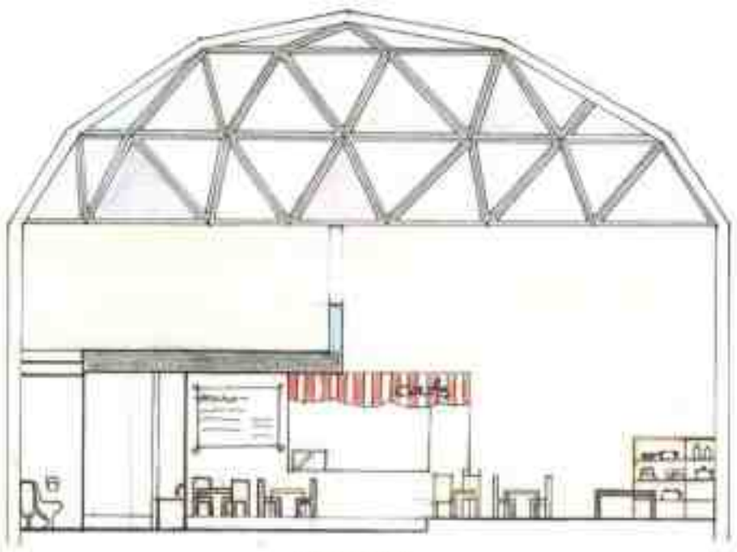
例えば、「竿燈祭りの提灯づくり」という企画を計画すれば、体験スペースで職人、県内の人々、県外から訪れた人々、大人から子供までが1つずつ提灯をつくる。それはやがて、大きな竿燈になるだろう。



また、その作品の様子が移り変わっていく様子を、様々な人々がSNS等で共有すれば、秋田県の輪が広がってゆくだろう。



北立面図



断面図

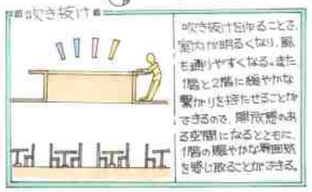
Make a connection space

コンセプト

私たちは日々様々なものと関わりながら生きている。家族や友人はもちろん、見ず知らずの誰かともつながっている。知らない誰かの仕事が私たちの生活を支え、豊かにしている。そしてその人たちのおかげで今の自分があるといっても過言ではない。そこで自分に関わってくれている人たちに感謝を伝えることができる建築物を提案する。ここには地域に住む様々な人が集まる。使用目的は読書・休憩・勉強と様々で小学生から学生、お年寄り、サラリーマンなど普段から関わりのない人たちが同じ建物を共有して使うことで誰もが普段見えなかったつながりに気づくことになるだろう。この建物は各側の壁をなくし一つの空間にすることで、ここにいるときはお互いが存在を認識することになり見えない誰かとのつながりが見えるようになる。そして、自然とその人に対する感謝の気持ちが生まれるだろう。「どうぞ」を「感謝の気持ちをもつ」という認識とした、誰かのことを想いありがたさが感じることができる地域のための建物となるだろう。

Diagram

■吹き抜け■



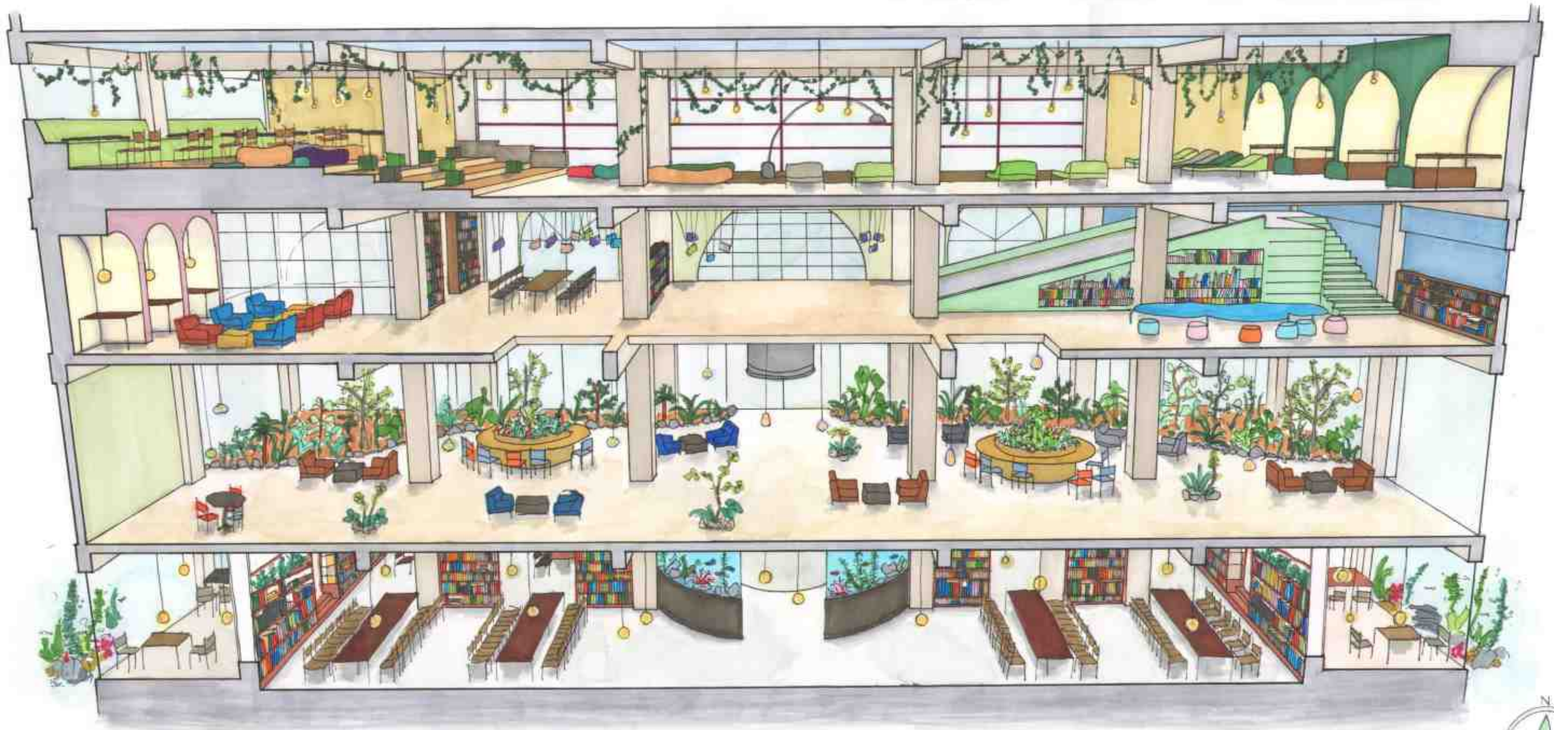
吹き抜けを作ることで、室内が明るくなり、風も通りやすくなる。また1階と2階に穏やかな繋がりを持たせることができるので、開放感のある空間になるとともに、1階の穏やかな雰囲気を感じ取ることができる。

■イスの種類■

小さな子供から、年寄りの人まで、様々な年代の人達が利用するこの施設では、長時間作業をするとき、自分が一番落ち着いた状況で、集中できる環境が必要である。そのため、様々なイスの種類を用意して、自分が一番快適に住ごせるイスを選ぶことができる。また、形や色の種類もたくさんあるのでインテリアとしても活用することができる。

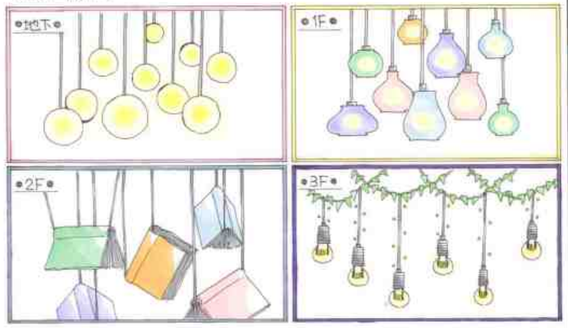
■自然■

施設全体に取り入れられている植物は、雰囲気を明るくし、心地よく過ごせるリラックス空間にする。また、空気清浄効果や、目の疲れ・ストレス軽減効果があるため、作業効率が上がる。



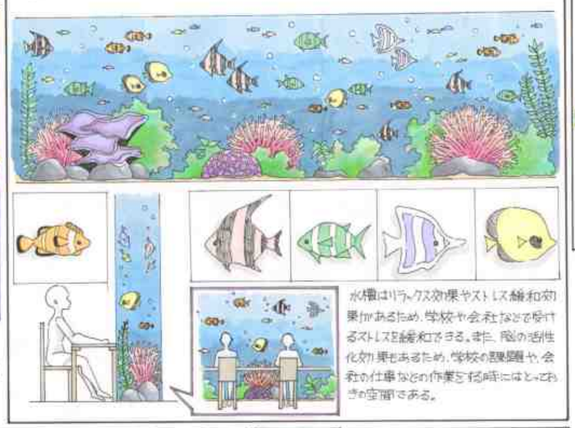
● 内観断面パース ●

■天井 照明■



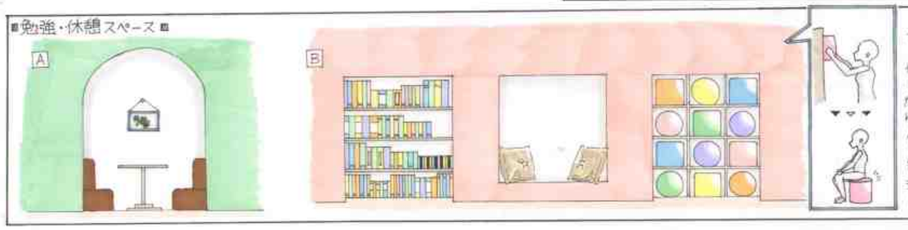
各階の天井照明は、デザイン性に優れた照明を使用している。そのため、光の当たり方、色合い、照明器具のデザインによって、各階の雰囲気が大きく変わる。各階の雰囲気に合う照明になっているので、ふと上を向いた時にも、楽しむことができるようになっている。

■地下部屋 水槽■



水槽はリラックス効果やストレス緩和効果があるため、学校や会社などで受けるストレスを緩和できる。また、脳の活性化効果もあるため、学校の課題や、会社の仕事などの作業をする時にはとっておきの空間である。

■勉強・休憩スペース■

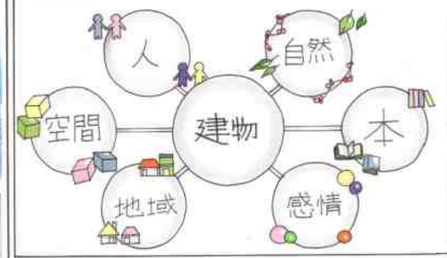


1人や少人数で勉強・読書または作業をしたいとき、活用できるスペースである。

図Aは、ちょっとした時間に勉強したり、休憩ができるスペースになっている。

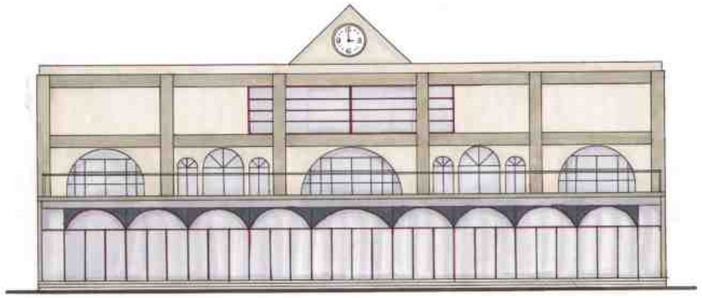
図Bは、本棚、座れるスペース、イスの収納棚がある。本棚から本をとり、座れるスペースでゆっくり本を読むことができたり、イスをたくさん使うと、友達同士や家族みんなで会話をして、コミュニケーションを取ることができたりする。収納棚は、コンパクトに収納でき、インテリアとしてもオシャレに見えるため、とても良い。

■建物と周辺のつながり■

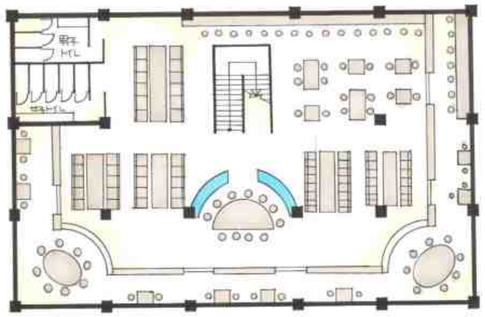


この施設は、今までに無かったつながりやありがたさを知ることのできる建物だ。例えば、普段の生活の中で関わることのないお年寄りの人々と出会うことができたり、地域を支えてくれている自然を身近に感じることができたりする。また、3階から3階の空間を通して同じ趣味を持つ人や、新しく出会った人、色々な年代の人達とコミュニケーションをとることができる。

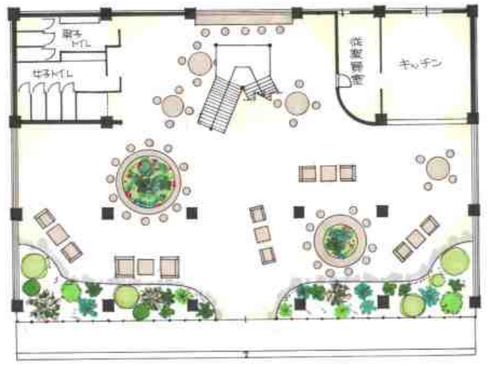
特に、本は年代によって流行・人気のジャンルが少しずつ異なる。そのため、若い人がお年寄りの人達が読んでいる本に興味をもった場合、本の話題を広げることで、コミュニケーションがとれて、新しいつながりをつくることもできる。その時に感じる楽しさ、嬉しさ、驚き、不安、焦り などの感情は、コミュニケーションを取っている相手と共有ができる。学ぶ・遊ぶ という行動を通して、つながりやありがたさを知ることができる建物である。



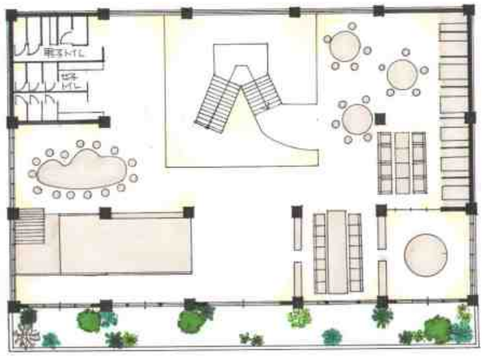
● 南立面図 scale 1:150 ●



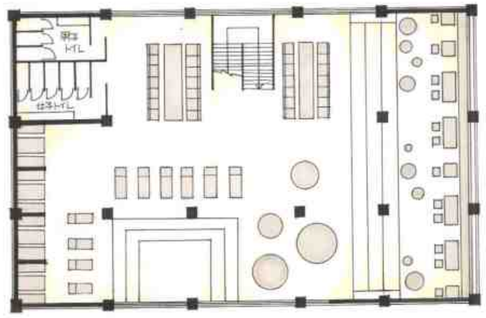
● 地下1階平面図 scale 1:200 ●



● 1階平面図 scale 1:200 ●



● 2階平面図 scale 1:200 ●



● 3階平面図 scale 1:200 ●

互恵の商店街

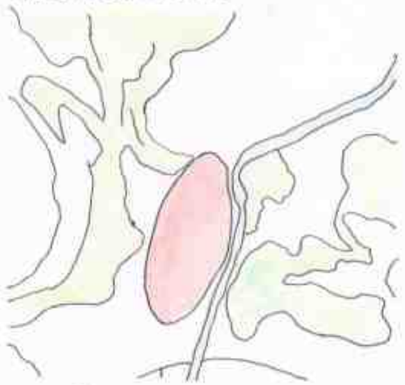
自然が豊かな浜松市。
多くの自然に囲まれた、とある商店街。
天竜区二俣、クローバー通り。
かつてのこの商店街は、店が集まり生活を支えた。
地域の客はその対価としてお金を払ってきた。
しかしその商店街も廃れてきた。

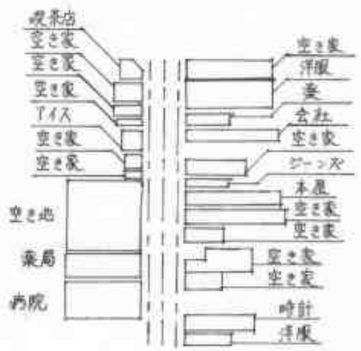
お金ではない"きもち"の交換と共有をし、賑わいを取り戻す。
それは"どうぞ"を返したくなるような心遣、返報性の原理。
それを利用し、お互い創意を含んだ"互恵"を実現する。
商品の交換だけではない。
自然、まち、人がお互いに支えあう新たな商店街を創る。

断面パース

01 敷地説明

敷地は、浜松市天竜区二俣にある商店街"クローバー通り"。喫茶店や洋服店、本屋などが立ち並ぶが空き家が多い。周辺には天竜杉が生えている所が管理が行き届いていない。



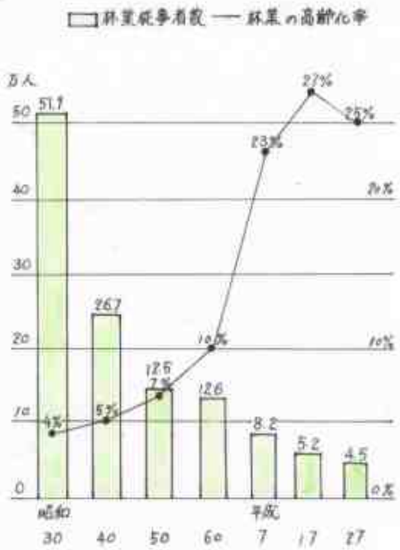


現況図

02 社会問題：林業の衰退

日本産の木材は輸入した木材に比べ高価なため、外国産の木材が多く使われている。その影響で日本の林業は衰退の一途をたどり、林業従事者の減少が問題になっている。

林業従事者数と高齢者比率の推移

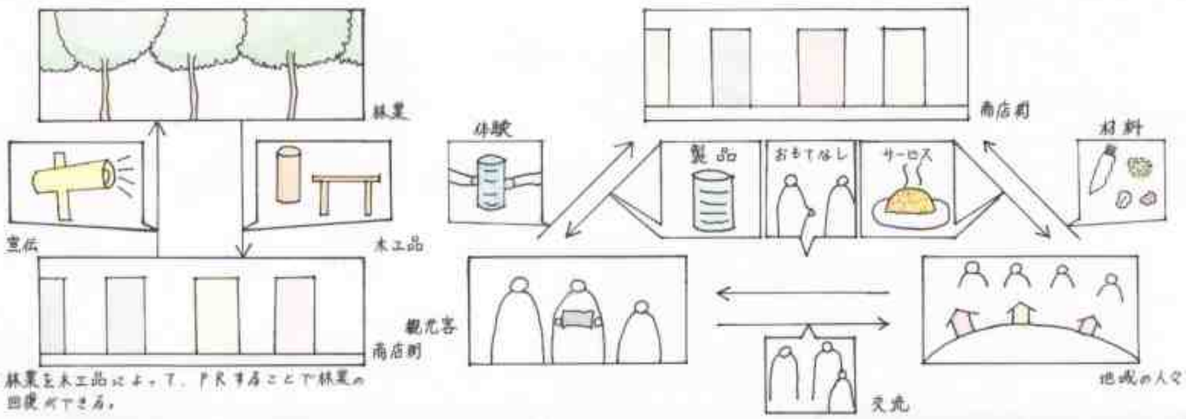


資料：総務省「国勢調査」
林野庁「森林・林業白書」
森林・林業学習館

03 どうぞを広げる返報性

一方的などうぞは、おくるだけ。おくり返したくなる返報性の「どうぞ」にすることで「どうぞ」は広がっていく。

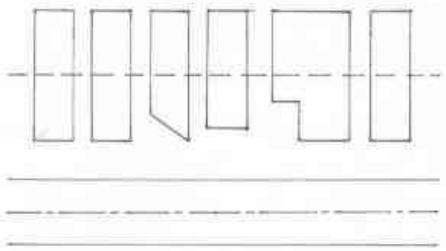
04 林業と商店街の返報性



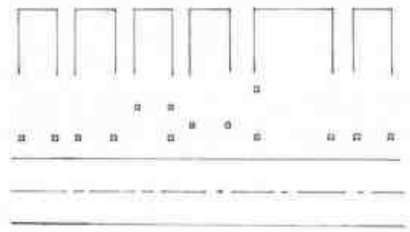
・林業を木工品によって、PRすることで林業の回復ができる。

05 返報性のカタチ

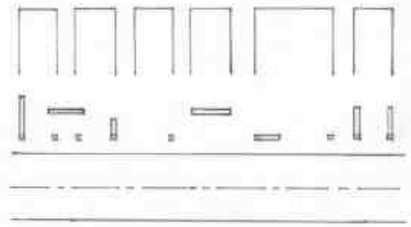
1. 1階の壁を点線まで減築する。



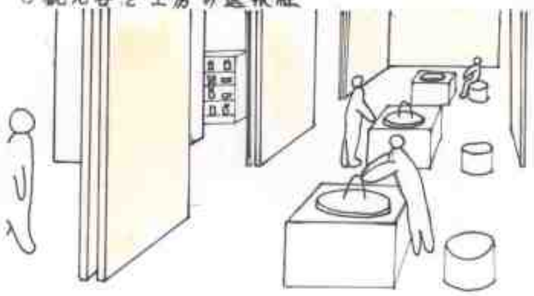
2. 減築した部分に歩道をつくり、商店街の一体感を生む。



3. 天竜材で作った壁柱で空間の区切りをつける。

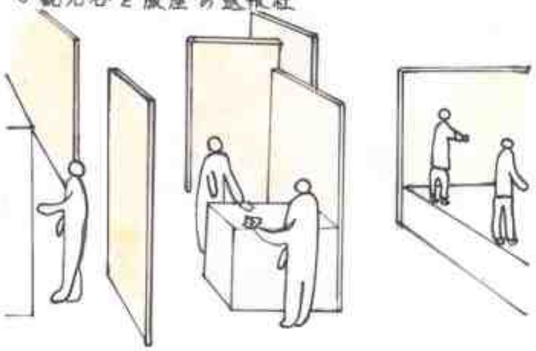


○観光客と工房の返報性



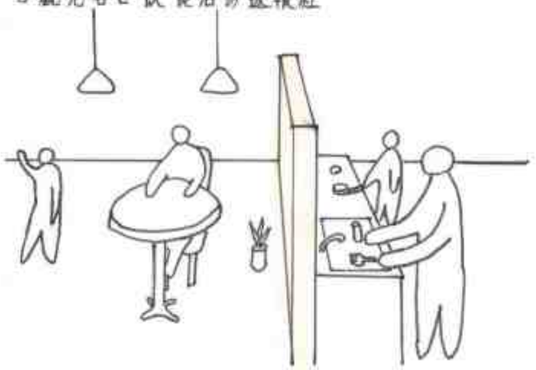
観光客に陶芸体験をさせ、その一部を寄付してもらう。

○観光客と服屋の返報性

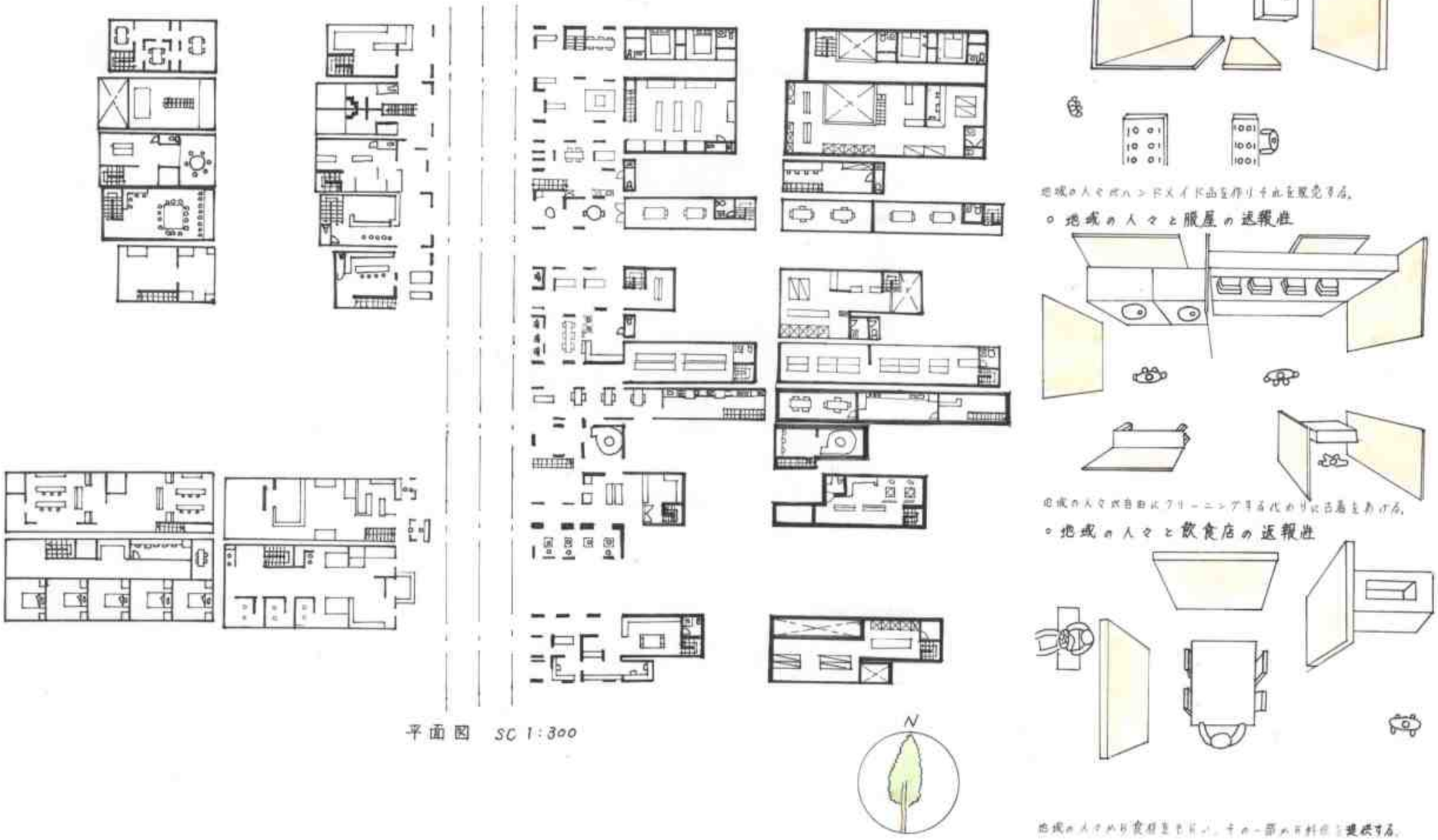


服の着し出しを観光客にして宣伝につながる。

○観光客と飲食店の返報性

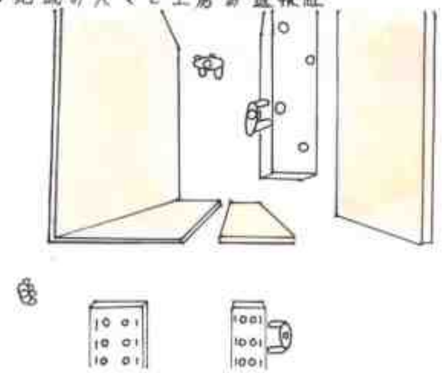


空間の提供をして、観光客に料理体験をさせる。



平面図 SC 1:300

○地域の人々と工房の返報性



地域の人々がハンドメイド品を作りそれを販売する。

○地域の人々と服屋の返報性

地域の人々が自由にクリーニングする代わりに古着をあげる。

○地域の人々と飲食店の返報性

地域の人々から食材をもらい、その一部から料理を提供する。

断面図 SC1:100

みんなで協える

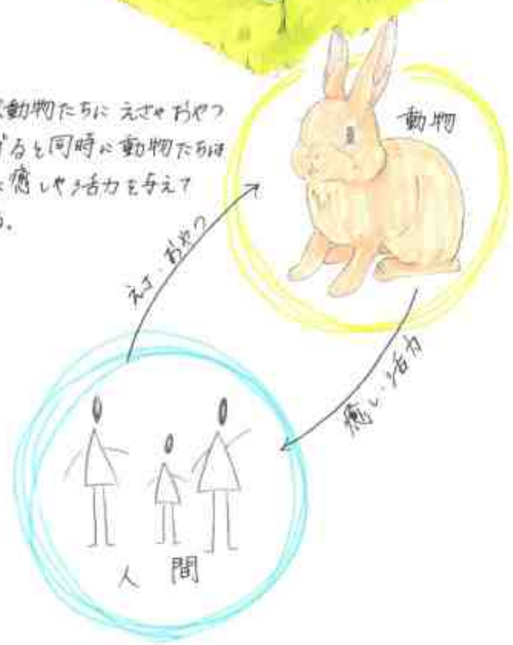
「協」とは多くのものが一つに合わさるという意味です。地域とお店、人と人、人間と動物、それぞれの力を合わせることが大切だと思います。
互いに支え合う「ともだち」関係を築くことができる。また地域の人々と共有できる力なども考えました。

山陰地方の過疎化問題は深刻である。過疎化が進んでいる地域では空き家が増加している。空き家が放置される「景観」や倒壊などの問題を引き起こすため、いち早く解決する必要がある。その空き家の一軒を引き取り、建て替える。

また、地元で採れた野菜や果物を使用した食事を提供することで農業を応援する。傷や虫食いの痕がつくなどして出荷できない規格外野菜を動物のえさとして役立たせることで、生産段階で発生する食品ロスの削減を目指す。

動物にとって、ストレスの少ない環境にするために、床や壁には木材を使い、人が密集しないよう広い空間を確保する。田舎の豊かな自然を活かして、心地よい場所をつくる。

人間が動物たちにえさやおやつをあげると同時に動物たちは人間に癒しや活力を与えてくれる。



この カフェ では たくさんの動物たちとふれあい、えさやり体験をすることができる。動物たちが人間にあたえる影響は大きい。元気や活力をもらうだけでなく、ストレスや不安を和ませる。高齢者にとって健康維持の大きな役割を果たしている。また、子ども達にとっても、非言語コミュニケーション能力の発達になり、"思いやり"の心を育むことが知られている。

広いターゲットのカフェにすることでコミュニケーションを活性化させ、年代を超えた新たな人々と知り合いきっかけになる。人と会って楽しい時間を過ごしたり、外出する機会が多くあったりすると、明るくいきいきとした日常を過ごすことができる。"出会いの場"、"交流の場"、"仲間づくりの場"など、より多くの「場」を提供する。

6,000
3,000
6,000
15,000
15,000
便所
便所
手洗い
洗濯室
洗濯室
浴室
納戸
キッチン
冷蔵庫
茶席
バラエティエリア
ビュフェエリア

平面図 1：100

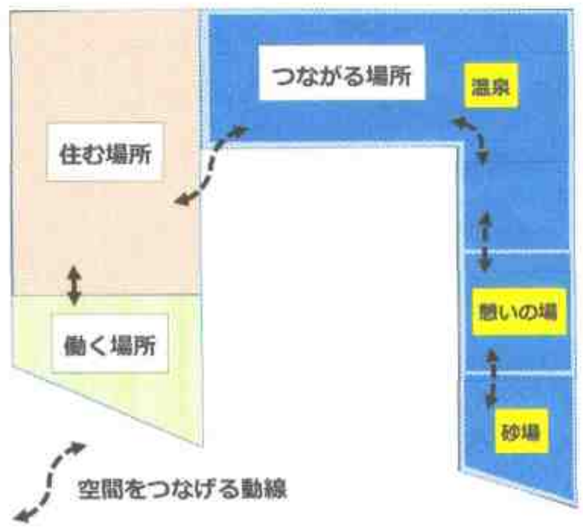
どうぞお越し下さい「駐在所」へ
～毎日通いたくなる駐在所の提案～

○目指す駐在所像

地域とのつながりは仕切りやフェンスで断ち切られ、住民との間には距離を感じる。新型コロナウイルスの影響で、より一層このことが明確になっている。

駐在所は警察官とその家族も、その地域の一員として生活をする。そのためには、フェンスや仕切りなどを取り払い、建物自体も警察官と地域住民がつながる構造や仕組みでなければならないと考える。

駐在所に「つながる場所」を



「住む場所」と「働く場所」という駐在所の基本的な機能を持つことは当然ですが、それ以外に地域と警察官が緩くつながることができる空間「つながる場所」を設けます。そして、全体に占める「つながる場所」のスペースを広くとることで、多くの人に、「地域に開かれた駐在所」であることを認識させます。

コンセプト

凶悪犯罪や交番襲撃などが度々起こる現代社会、セキュリティーや安全上の配慮から、交番や駐在所の構造は大きく変化している。

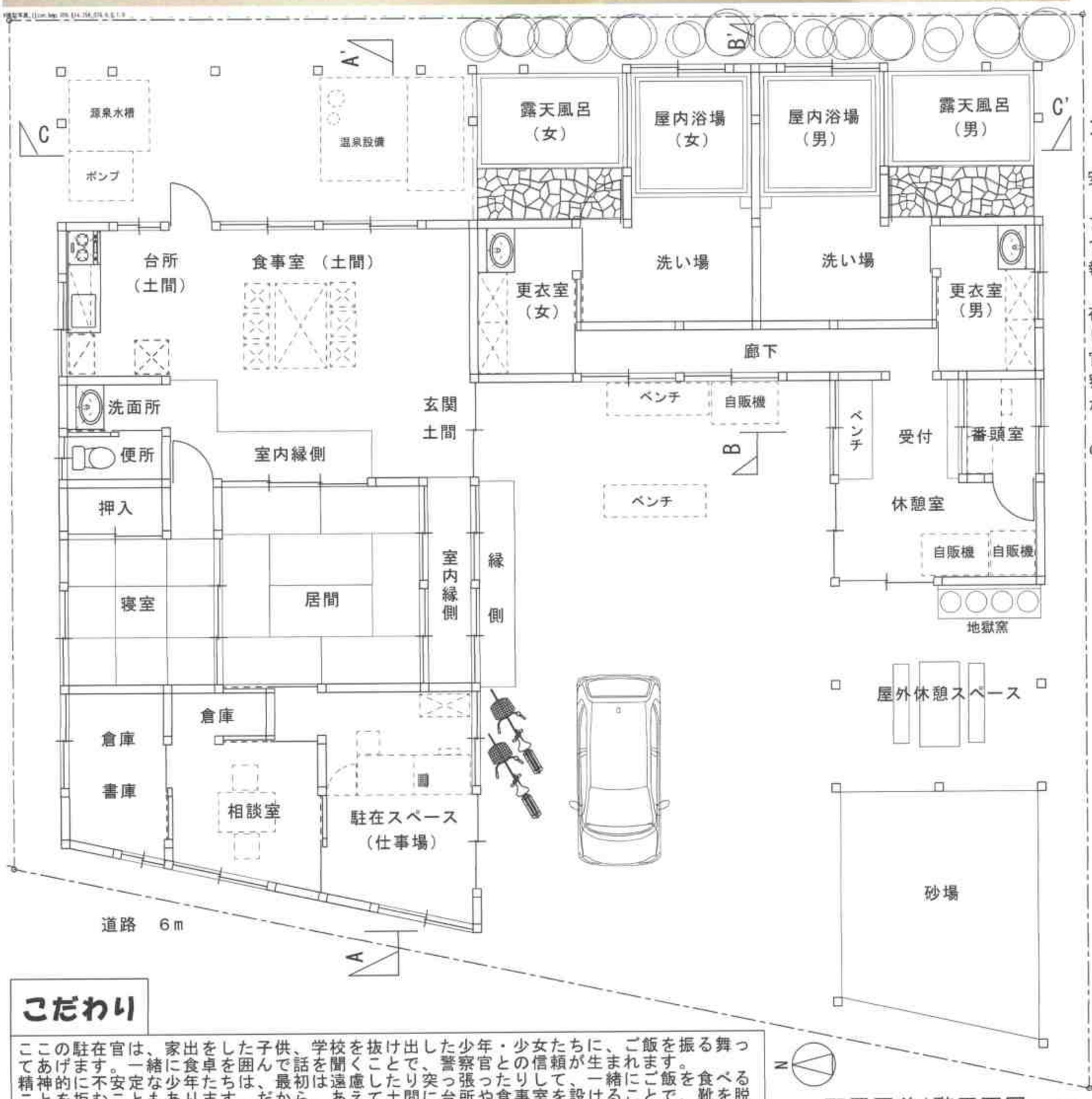
利用者（市民）と警察官の間には仕切りがあり、駐在所の場合は、プライベートの居住スペースは明確に分けられてフェンスで仕切られている。現代においてこのような配慮や構造は、警察官の安全な職務執行と生活には欠かせないものである。

しかし、田舎に多い駐在所は、本来もっと地域に対して開かれた存在でなければならないと思う。地域の方々と警察官が何気ない話で盛りあがり、困ったときは何でも相談できる環境をつくることで、警察官が地域の状況を知り、いざというときに住民の命を守ることが、警察官の本来の役割であると考えるからだ。そして、それこそが駐在所が存在すする意味ではないか？

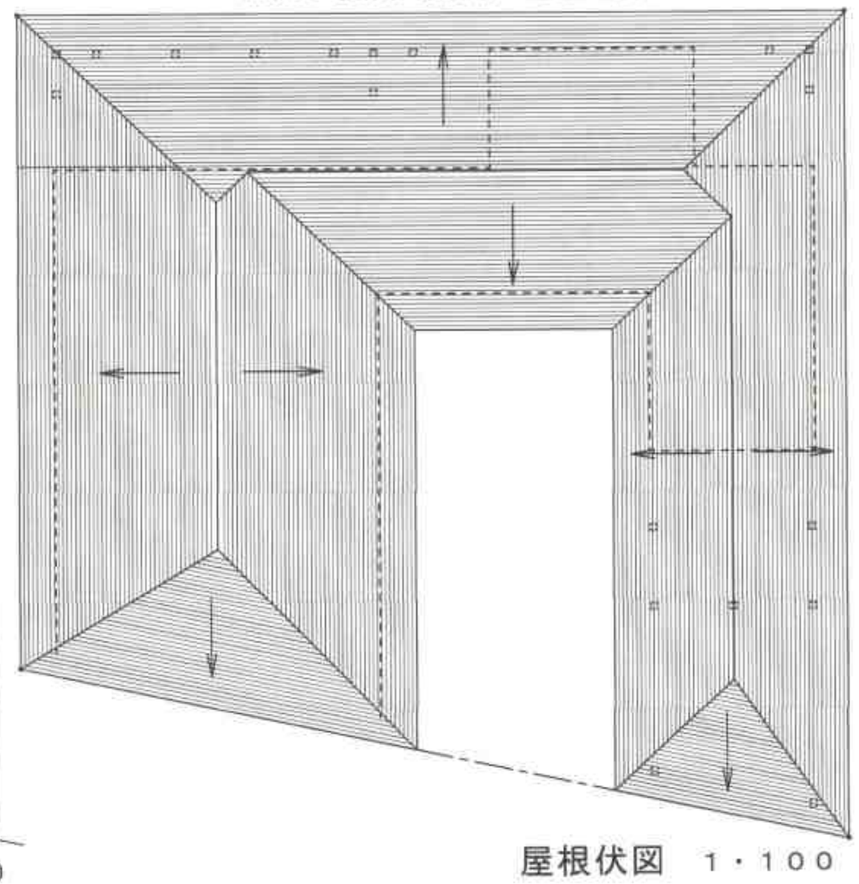
現実的に実現することはできないかもしれないが、今回提案するこの駐在所のアイデアが求められるような社会になることを願いたい。

この駐在所の大きな特徴は、温泉が併設されていること。
地域のお年寄りは、ここで汗を流し、高齢者の憩いの場に！

温泉の番頭は警察官の家族（奥さん）が行います



配置図兼1階平面図 1／50



屋根伏図　1・100

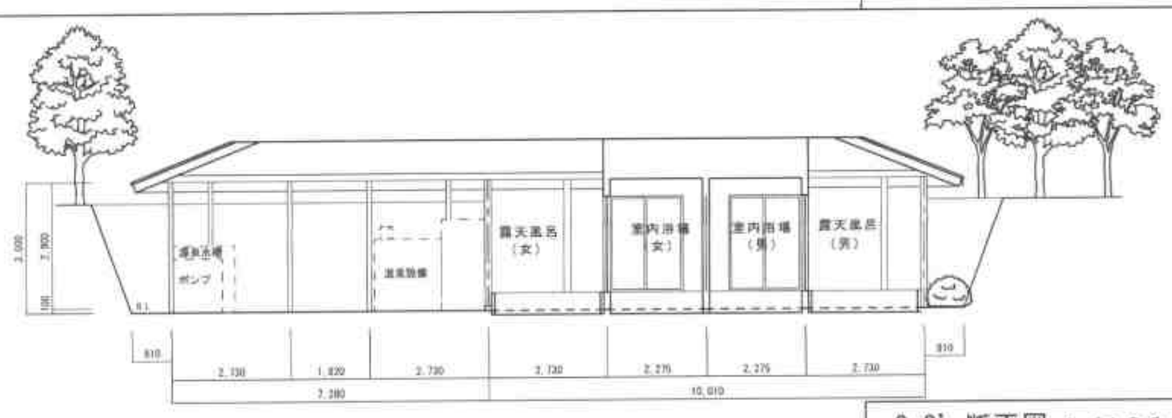
こだわり

ここの駐在官は、家出をした子供、学校を抜け出した少年・少女たちに、ご飯を振る舞ってあげます。一緒に食卓を囲んで話を聞くことで、警察官との信頼が生まれます。
精神的に不安定な少年たちは、最初は遠慮したり突っ張ったりして、一緒にご飯を食べることを拒むこともあります。だから、あえて土間に台所や食事室を設けることで、靴を脱入る必要がなく、食堂へ入る感覚で食卓を囲むことができます。

南側立面兼B-B' 断面図　1／100

西側立面図 1／100

A-A' 断面図　1／100

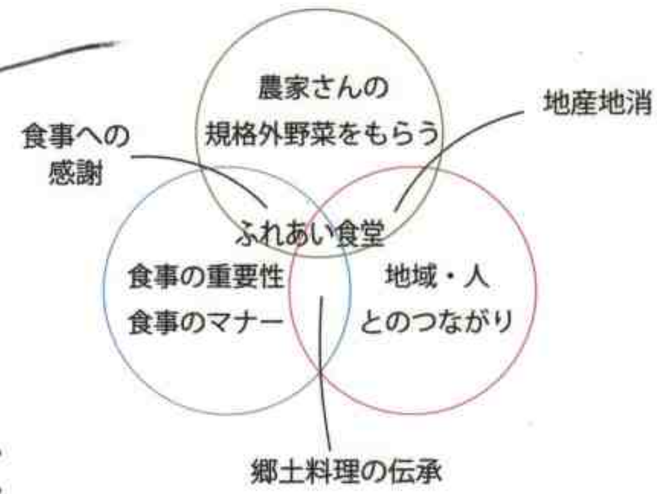


C-C' 断面図 1／100

ふれあい食堂

生活の3大要素と呼ばれる『衣・食・住』。最近、その中の食への関心が薄くなっている。食事の楽しさとは何か。きっとそれは食事を共にする人との団らんだろう。近年、コ食の問題が拡大しており、みんなで栄養整った食事の楽しむことの再確認が大切である。今回提案する空間は、地域とつながる子ども食堂である。
この子ども食堂では、「食育」「フードロス」「Community」の3つを軸がある。この3つの軸が意識された、空間の配置、食堂のシステムを考えられた。たくさんの人が関わり、一人一人が重要な役割を果たしてつながりつつ、『食』を楽しめる空間である。

道路や畑に対して開けたふれあい食堂。
多くの人が訪れやすいつくりになっている。



食育

様々な経験を通して食に関する知識と食を選択する力を習得する。健全な食生活を実現することができる人間を育てる。食事のマナー、食べ物の理解や感謝することも大事である。

フードロスの問題

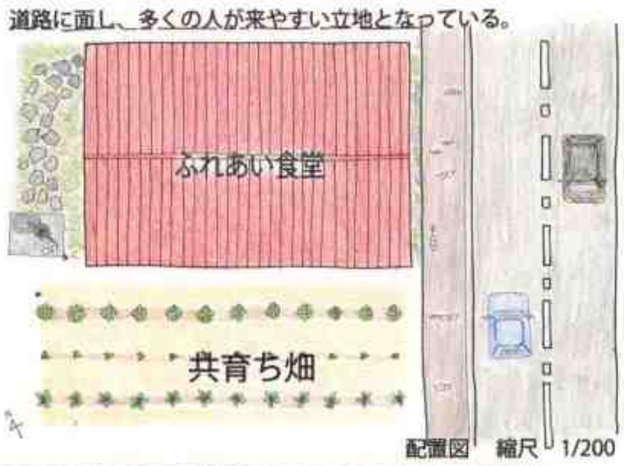
規格外野菜と呼ばれる大きさや色形品質が規格に適合せず捨てられる野菜がある。規格外野菜が発生する割合は総清算の 30〜40% といわれている。
規格外野菜を子ども食堂に寄付、もしくは低額で譲ってもらい子ども食堂で調理して、食べることでフードロス削減に繋がる。

Community

人とのつながりが強くなることで誰もが過ごしやすいオープンな地域になる。
農業、調理、食事、団らんが人がつながる手助けとなる。
また、四季や土地柄が豊富な日本の地域特有の食文化を継承する場にもなる。
人と人のつながり、地域のつながりを生ませる。

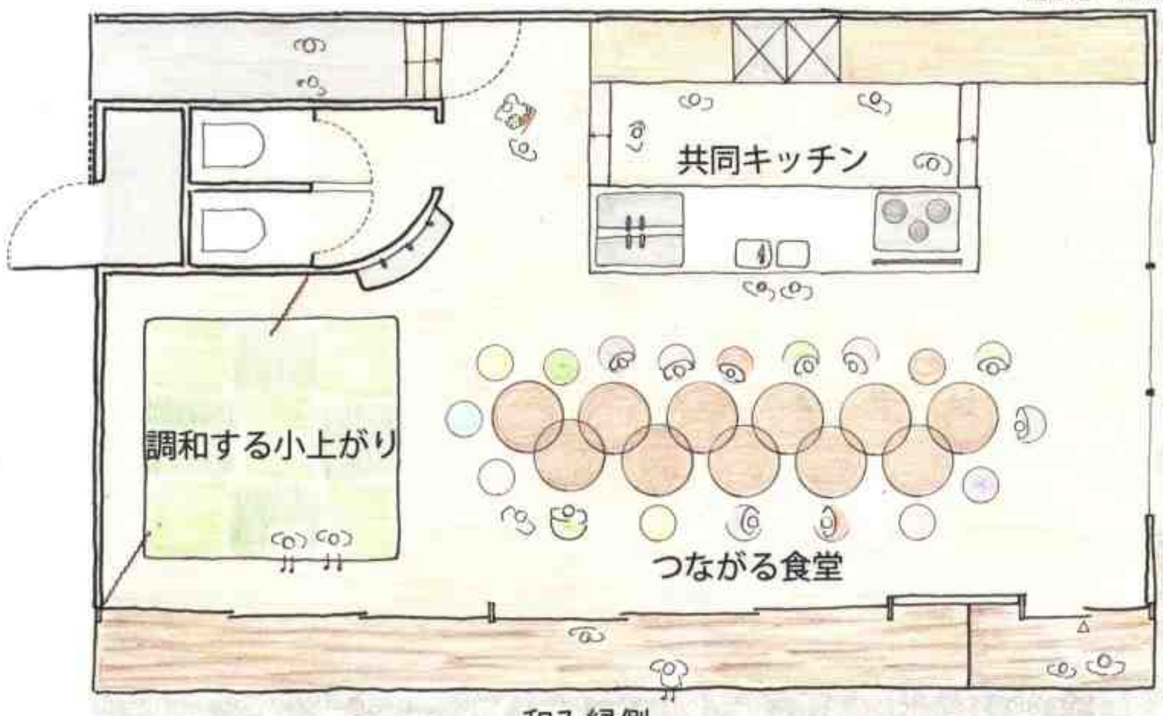
敷地

関東近郊にある、農業が盛んな地域である。
道路に面し、多くの人が来やすい立地となっている。



配置図　縮尺 1/200

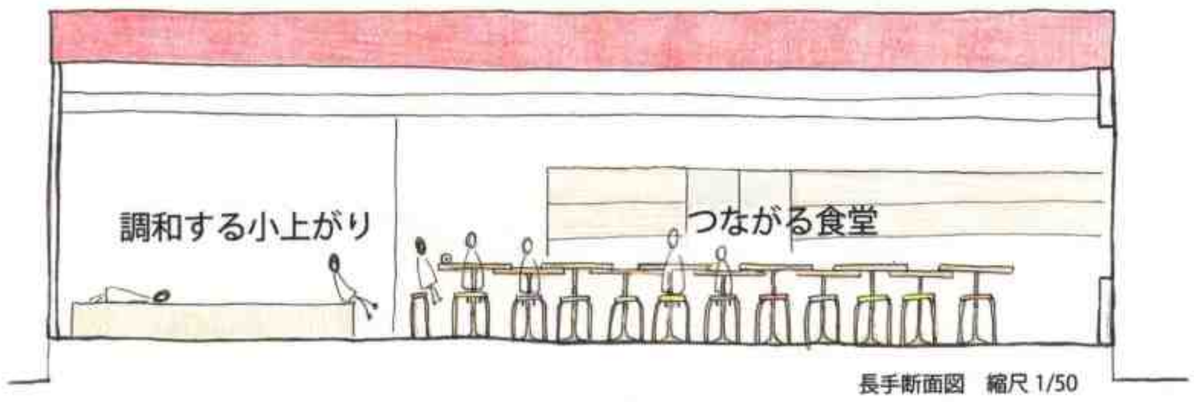
棚側とテーブル側で床の高さを変える。
大人と子どもが向かい合って一緒に料理を作ることができる。



平面図　縮尺 1/50

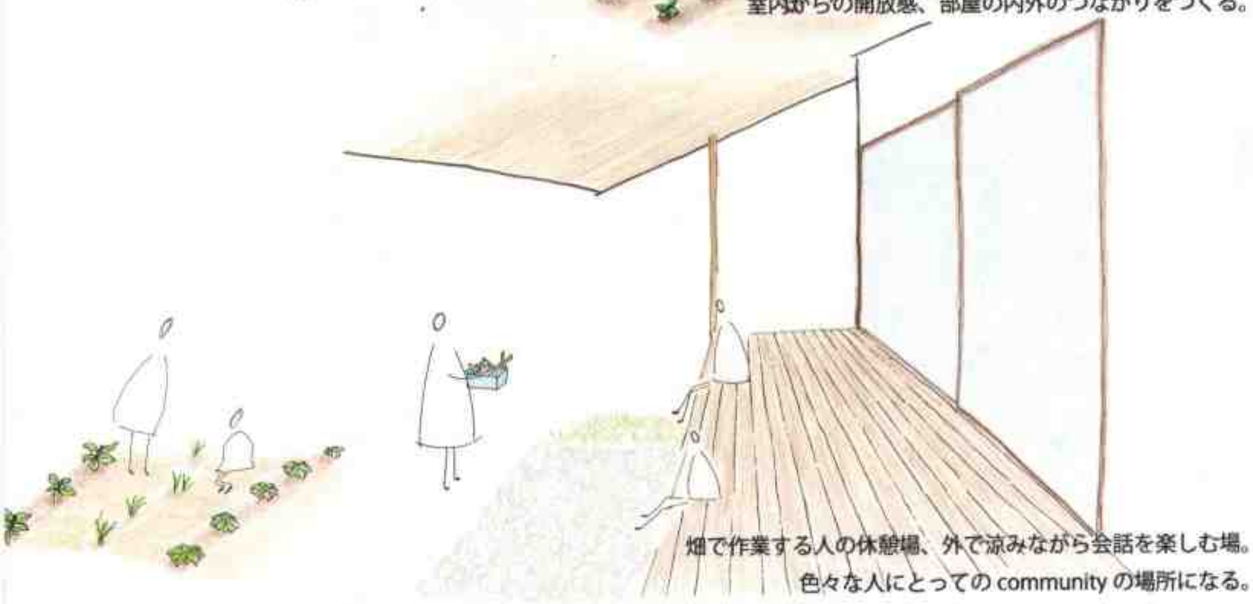
キッチンから食堂越しに縁側、畑を見通せる。
どこにいてもみんなとつながれる空間になっている。

畑側を大きな開口部にする。
室内からの開放感、部屋の内外のつながりをつくる。

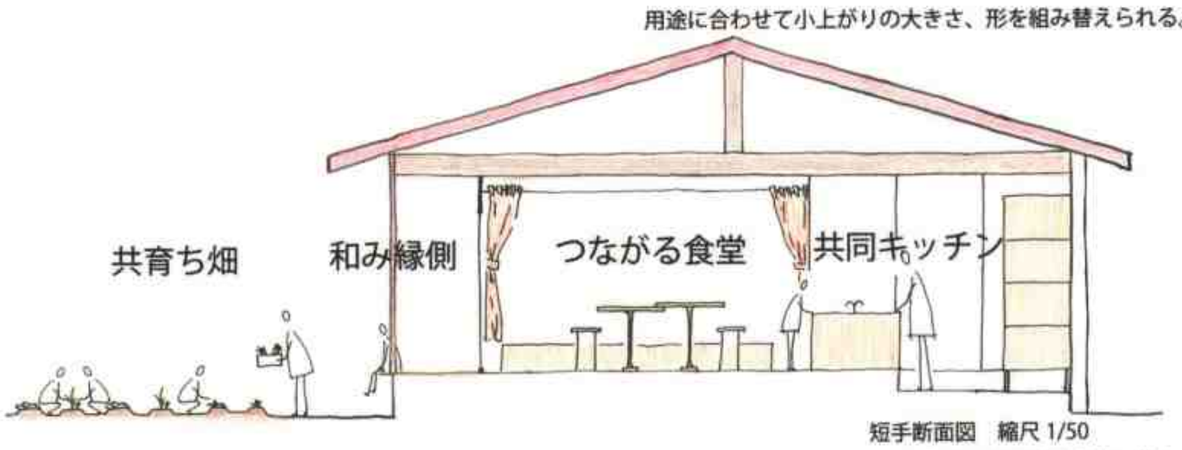


長手断面図　縮尺 1/50

西側にある小上がりはカスタマイズできる。
用途に合わせて小上がりの大きさ、形を組み替えられる。

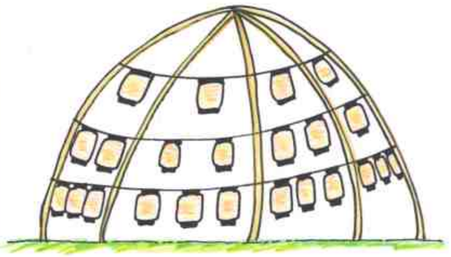


畑で作業する人の休憩場、外で涼みながら会話を楽しむ場。
色々な人にとっての community の場所になる。



短手断面図　縮尺 1/50

畑の中での community・食堂での community・キッチンでの community とさまざまな空間が連続的に続く。
キッチンは大人も子どもも使いやすい段差がある。



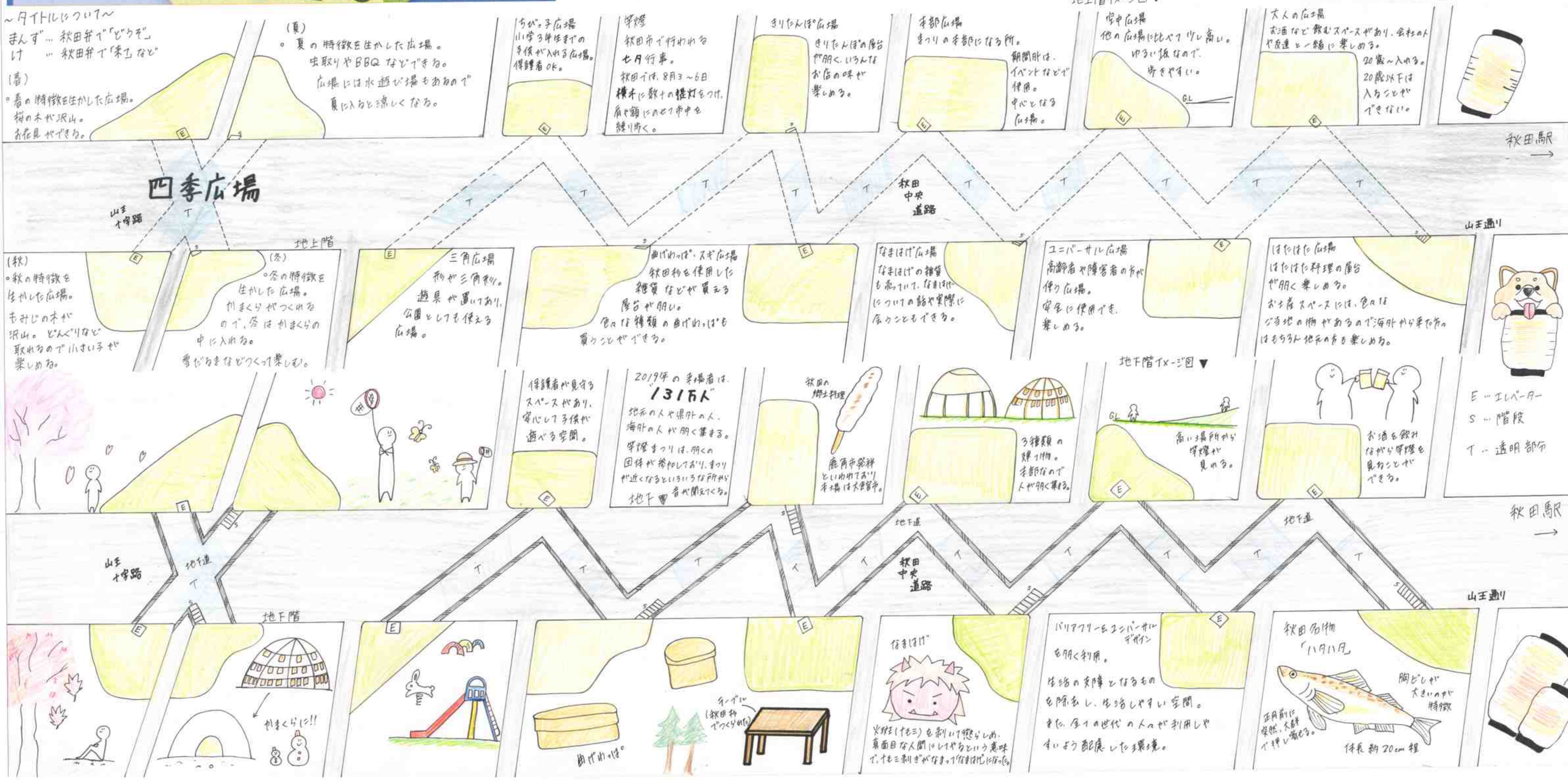
▲
提灯は取り外し可能。
ロウソクでなくライトなので安全。
竿燈の竿と同じ素材なので、期間外でも竿燈を楽しむことが出来る。
いつでも秋田の伝統を感じる事ができる。

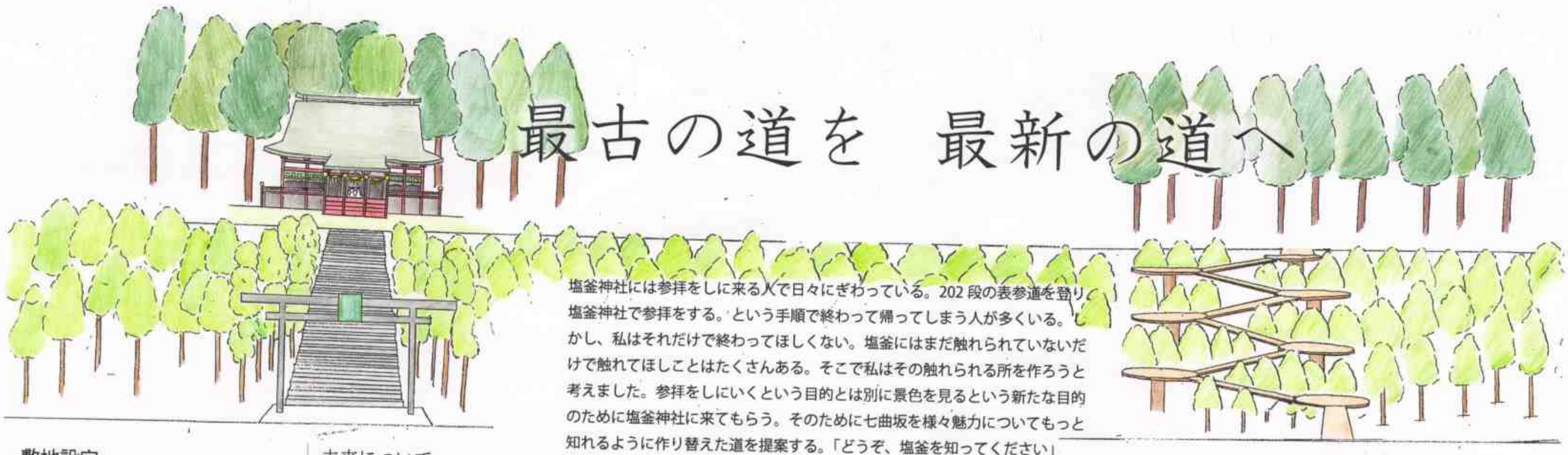
断面イメージ図 ▲

道路が透明なので、下から竿燈が見ることが出来る。
下から見ることが出来るので、自分が上げている感覚になる。
混雑を避けることが出来るので、ゆっくり竿燈を楽しむ事ができる。

秋田に住んでいた期間、竿燈まつりに観客としての参加、町内の一員としての参加、2パターンの経験を元に考えました。
祭りには多くの来客者が集まり、見たい人、移動したい人、それぞれ違う動きをします。
通りにくいところ、通りたいのに人が多くて通れないなどの問題があります。祭りの期間、期間外に通りやすい、見やすいところが増えるようにいくつかの広場を設けました。また、人が動きやすくなるよう地下道も設け混雑を避けると共に祭り期間外でも秋田の伝統を楽しめる空間を考えました。

地上階イメージ図 ▼



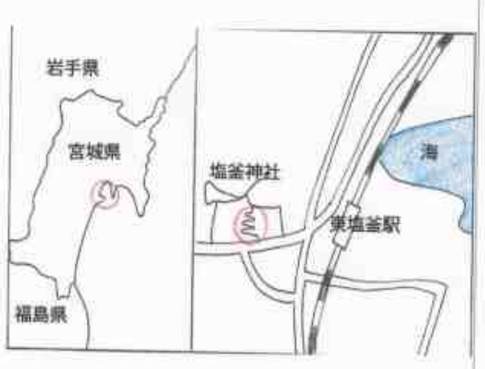


最古の道を　最新の道へ

塩釜神社には参拝をしに来る人で日々にぎわっている。202 段の表参道を登り塩釜神社で参拝をする。という手順で終わって帰ってしまう人が多くいる。しかし、私はそれだけで終わってほしくない。塩釜にはまだ触れられていないだけで触れてほしことはたくさんある。そこで私はその触れられる所を作ろうと考えました。参拝をしにいくという目的とは別に景色を見るという新たな目的のために塩釜神社に来てもらう。そのために七曲坂を様々魅力についてもっと知れるように作り替えた道を提案する。「どうぞ、塩釜を知ってください」

敷地設定

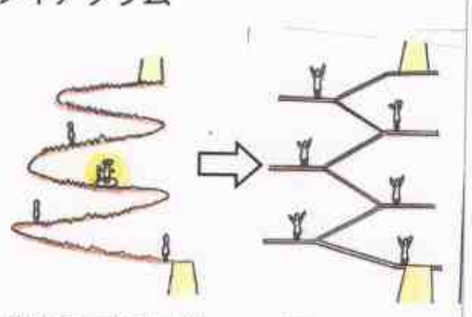
宮城県塩釜市にある塩釜神社。東北随一の神社であり、常日頃から観光客や地元の人が参拝をしに来ている。その中でも古道の趣を残している、塩釜神社に上るための最古の参道としてある、七曲坂という名前の通り七回曲がりながら登る坂道に注目した。



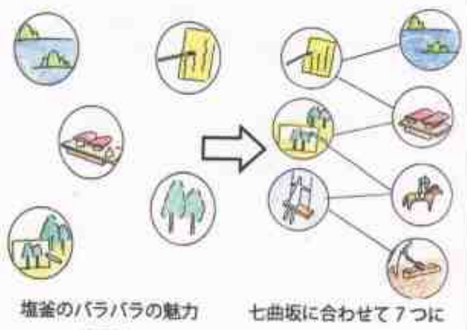
既存の道との関係性

	昔	対比 ⇔	今
場所	七曲坂	⇔	ツリーロード
目的	歴史を感じる	⇔	景色を見る
用途	塩釜神社に行くための最古の道	⇔	塩釜の魅力を知るための最新の道

ダイアグラム



神様も通っていた七曲坂　　人が賑わうツリーロード



塩釜のバラバラの魅力の要素　　七曲坂に合わせて７つにまとめる

未来について

昔から変わらず愛されている歴史を知ることと自然に触れることを合わせることで、私は未来について考えるのではないかと思いました。次世代の方たちが新しい風を起こし、塩釜をこれからさらに発展させるためには、さらに塩釜について知ることと自然の中で試行錯誤し考えることで、未来につながる考え方が考えられる。

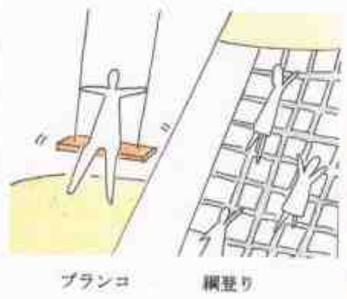
⑥文治燈籠と俳句

奥の細道により有名になった「文治燈籠」塩釜では数多くの偉人に昔から、塩釜についての俳句が詠まれている。なので、今の人たちにも実際に俳句を詠むことを体験してもらうことができれば、昔の偉人達と同じように俳句から、塩釜の魅力を共有できる。

俳句を詠む

②アスレチック

全身で塩釜の自然を感じるためにアスレチックを作りました。体を実際に動かすことで感じながら得られものがあると思います。子供も大人も楽しみながら体験してもらう。



ブランコ　　綱登り

自然との関わり

昔は自然に触れて遊ぶことが多い中、今ではなかなか子供ですらコロナ化やデジタル普及の影響で、自然に触れられていない気がします。塩釜の自然に触れることでその問題を解決できると思います。塩釜を知りつつも自然に触れて今一度自然との関わり方を見直すこともできる。

ツリーロード　全体パース

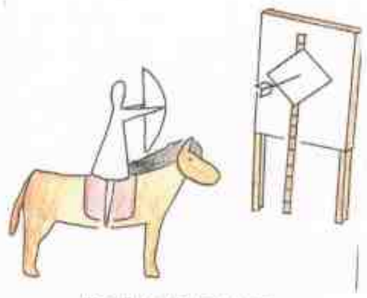
⑦絶景

ツリーロードを登っていくと、塩釜神社から見ることができる塩釜の町並みと日本三景である松島の海を一望できる。この道の最終的な目的はこの「絶景」である。この景色を見てもらおういう目的をこのツリーロードに持たせることで登ってもらう。

実際の塩釜の景色

③祭り

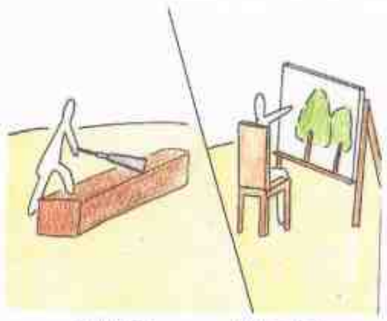
塩釜では昔から多くの祭りが行われてきました。その中でも「流鏑馬神事」という祭りは七曲坂で行われているため体験してもらいたい。実際に馬に乗り体験してもらうことで塩釜の祭りに興味を持ってもらう。



馬に乗り弓矢を引く様子

①体験

塩釜の自然に触れながら、何か体験することができないかと考えたときに、塩釜の景色を描いたり、木工体験ができたりすることができるのではないかと思いました。自然に触れることで創作工夫と努力を知れる。

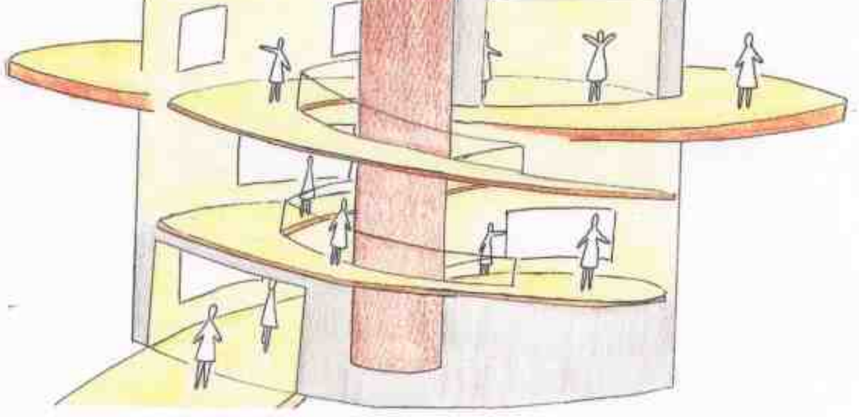


木工体験　　景色を描く

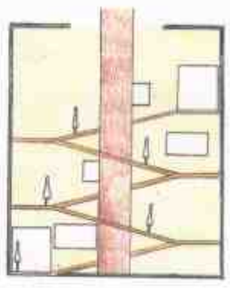
④小池曲江の作品鑑賞

塩釜出身の偉人の昔から見られてきた絵を共有

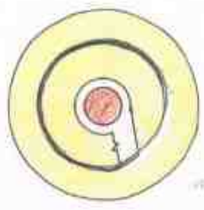
塩釜は、古くから景勝地として知られていて、多くの画家や文人が訪れた文化の地、その中に塩釜で生まれ、全国をまたにかけてきて活躍した画家が小池曲江である。その人物の作品から、昔から変わらず美しい塩釜を見て感じる。



博物館　断面パース

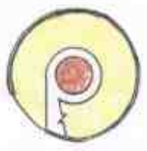


断面図

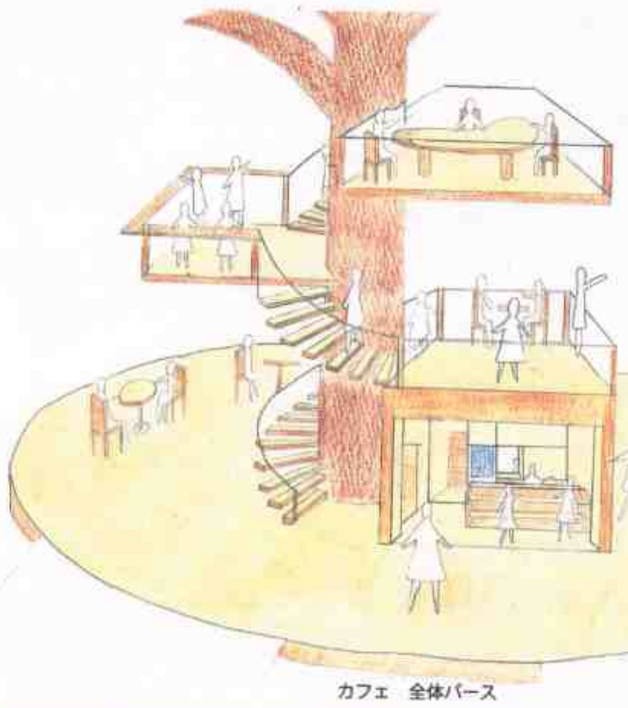


2 階平面図 S=1/200

1.5 階平面図 S=1/200



1 階平面図 S=1/200

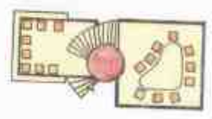


カフェ　全体パース

⑤カフェ

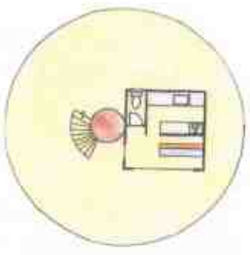
昔から共有されてきた食事

塩釜で伝統的な名産品として醤油や塩などの調味料や港町として栄えていることから魚が有名で、寿司を始めとした海鮮料理、南京糖や畝落雁といった塩釜の和菓子など昔から塩釜で愛されている食を感じてもらう。

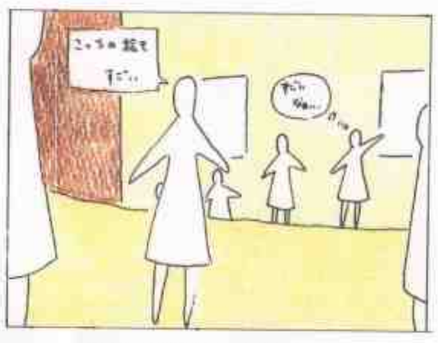


2.5 階・3 階平面図　1/200

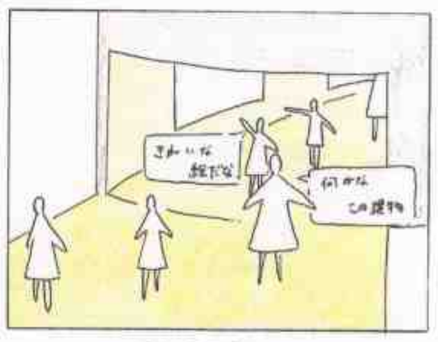
2 階平面図　1/200



一階配置兼平面図　1/200

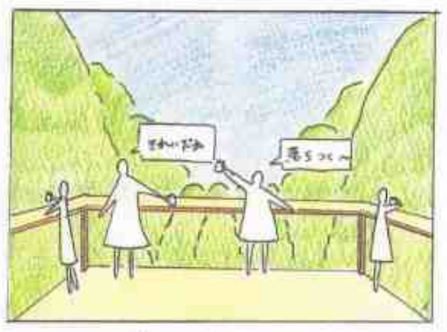


内観　らせんスロープ　パース



1 階　入口パース

1 階　店　パース



2.5 階　テラス　景色パース